

二〇一九年度 学位（課程博士）申請論文

西鶴浮世草子の好色物における主題とその表現方法

同朋大学大学院 文学研究科 仏教文化専攻

日比野 洋文

目次

はじめに

1

第一章 『榎久一世の物語』における主人公の混乱とその悪化

5

第一節 主人公の人物像 5

第二節 異常性の正体 12

第三節 各章の関係① 20

第四節 各章の関係② 33

第五節 小結 52

第二章 『好色一代女』における「二項対立」構造の再検討

59

第一節	先行研究	59
第二節	構想	65
第三節	モチーフ	70
第四節	モチーフの出現 1	75
第五節	モチーフの出現 ②	90
第六節	主人公の職種	99
第七節	主題	111
第八節	小結	118
付録		119

第三章 『色里三所世帯』の構造

第一節	心理描写	162
第二節	「もてあそび」と「執心」	165
第三節	各巻の内部構造	173
第四節	物語の全体構造	202
第五節	三都の配置	211
第六節	主人公の人物像	218
第七節	小結	227
付録		230

おわりに

## はじめに

井原西鶴が著した浮世草子と呼ばれる散文作品は、独立した話を集合させた形態のものが多い。それに該当する作品を一つ一つ取り上げるまでもないだろうが、例えば一代記的な作品である『好色一代男』や『好色一代女』にしても、作品を構成する各章は主人公という存在によって接続されてこそいるが、その内容は独立したものが多く連続性は薄い。けれども、西鶴の作品が、読者の興味を満たすものであるように、独立した話を内包する各章によって、作品の主題とするところが映し出されていることも確かである。では、西鶴の個々の独立した話から主題を映し出す、その方法とはどのようなものだろうか。そこ

に西鶴らしさといったものは存在するのだろうか。

現在までに西鶴作品における構成・表現・描写といった話の方法は、諸家の手によって様々な観点から研究され、大きな成果が挙げられている。その一つに、野間光辰氏の「西鶴五つの方法」（『西鶴新新攷』所収（岩波書店、一九八一年））があり、当該論考が今日の西鶴研究の基礎を成していることを筆者は承知している。けれども、野間氏の論考は論題の通り西鶴の「はなしの方法」「俳諧的方法」「劇的方法」「改構改刪の方法」の五つを取り上げ、これを詳細に分析したものであるが、主題を映し出す方法の特徴といった点については言及していない（なお、氏は「俳諧的方法」のみ当該論考では触れず、同書所収の「嵐無常物語―解釈とその理解」において触れている）。また、野間氏以後の西鶴の話の方法に関連する研究は、氏の研究が大きな成果を挙げたためか、作品全体から個々の作品

に移行しているようであり、上述の西鶴作品における主題を映し出す方法の特徴といったところについても、言及されていないようである。

そこで本論文では、西鶴の各作品における主題とその表現方法の分析を通して、西鶴らしさといふべき、表現方法の特徴を検討する。もともと、それを検討するには各作品への理解が前提になるが、西鶴の作品は、好色物、武家物、町人者、雑話物、遺稿作品と多種多様であり、かつ、作品ごとに異なる主題が設定されている。その全容を把握することは容易でないであろうし、試みるにしても紙幅がいくらあっても足りないことは明らかである。したがって本論文では、分析の対象を好色物に数えられる『椀久一世の物語』『好色一代女』『色里三所世帯』の三作に限定する。そして、三作の主題と、その表現方法を分析・確認し、さらにそれを比較することによって、西鶴の主題を映し出す、その方法の特徴を

明らかにする。なお、分析対象を右の三作に限定する理由としては、三作がともに一代記的な作品であり、かつ、主人公の「明」から「暗」への転落の人生を描いた作品であることにある。物語の展開に共通点が存在するということは、主題を映し出す方法にも共通点が存在するのではないかと筆者は考えたからである。また、詳細は後述するが、本論文で扱う三作品の作品構成については、長尾三知生氏、広嶋進氏、森耕一氏の論考が存在し、大きな研究成果が挙げられている。本論文はそうした先学の研究成果を踏まえつつ、右に述べた筆者の疑問を検討するものである。



## 第一章 『椀久一世の物語』における主人公の混乱とその悪化

### 一 主人公の人物像

『椀久一世の物語』(貞享二年(一六八五))は、実在の人物・出来事を題材にしたいわゆるモデル小説である。主人公椀久のモデルとなった人物は、本書刊行の以前に亡くなっていたようではあるが、その生前の姿については定かでない。そのため、本書に描かれた主人公の散財、破産、遊女松山との離別、精神錯乱といった出来事が事実であるのかも定かでない。もともと、結末で主人公は命を落とすように、死という点では、モデルと

思しき人物と一致する。西鶴は、その主人公の死の場面を次のように描写する。

舟の苦葺を引まくりて、女郎のお名を聞きたいと申せば、大じん腹立して、我が物数奇にて鼻毛よまれて遊ぶに、おのれにかまふ事かと云へば、椀久笑うて、しやつら二つに、刀握れば覚えありと、竹杖をするりと抜けば、まことの事と思ひ、かたへの物の短気にて抜合はすを、舟人立ちかさなり、水棹手毎に椀久を叩きふせ、川浪に落ちかかるまで、弓矢はちはちと云ふ声も、底に沈みて、あはれや浮世のかぎりとなりぬ。

(巻上の七)

白井雅彦氏によれば、主人公の水死は「巷間喧伝されていた」ものであり、ゆえに「西鶴が本作にあつては、結末を先行させて全体の構想を立てていた」と指摘する<sup>10)</sup>。そして、

その現れとして、物語の発端で主人公に蔵の鍵(財力)を授ける福德の神・弁才天が、水神

でもあることを指摘し、水死という結末を「水神である弁才天によって内蔵の鎔を与えられた椀久の放蕩が断罪される場面」と解説するように、本書の「因果応報譚的構想」を指摘する。水死という設定が事実か否かはさておき、本書が刊行されたときには、すでにモデルと思しき人物が亡くなっていたことに加え、作品が「因果応報譚的構想」のもと構成されているということからすると、西鶴が主人公の死を前提に物語の構想を立てていたとする氏の指摘は穏当だろう。筆者も、この観点から以下に述べる疑問を考察していきたい。

さて、主人公が命を落とす際の言動に注目すると、「椀久笑うて、しやつら二つに、刀握れば覚えあり」と描写されているように、彼が異常者であることが読み取れる。この点に注目すれば、彼の死因は水死であるが、狂死とか異状死とも言えよう。事実、先にも述べたように主人公は、親譲りの財産を使い込み破産した後、「狂人」と化している（巻下

の三)。本書は、主人公の財力の状況に注目し、「栄華」（「豪遊」）と「零落」を描いた物語であるとたびたび指摘される<sup>50</sup>。けれども、西鶴が主人公の死を前提に構成を立てていたであろうことからすると、主人公の狂人化と狂死するまでの変遷を描いた物語であると言った方が、適当であるかもしれない。

もつとも、物語の後半で「狂人」と化す主人公であるが、その彼がもとより「非日常的な世界の人間」であるという指摘もある。広嶋進氏<sup>51</sup>は、主人公が栄華や零落といった自身の状況に関わらず、手にした金銭や物品を「つかいはたす」人物であることを指摘し、その人物像を次のように分析する。

「つかいはた」し続ける主人公は、一貫して日常の秩序・規範とは反対の世界にいる。

語り手は、上巻で、蕩尽する主人公を「大かた積り（＝見つもり）もあるにむしやうと

いふ男（『無分別な男、でたらめな男』是なり）（上の二）と評する。そして下巻において主人公は狂人となり、文字通り、分別・判断力を失う。「無性な人」には「病気や眠気などのために、時分の判断力、感覚を失っている人」の意味がある（『邦訳日葡辞書』「ムシヤウ」の項）。椀久は上下巻を通して、変わることなく、通常の「積り」や「判断・分別」の外に存在する人間であった。

また、長尾三知生氏も広嶋氏と同様に、主人公の異常性を指摘する。長尾氏は、主人公の「否定住、放浪、行方不明の意を表す言葉」と、「夢」や「無常」という語が作中に多く出することに注目し、そのいずれもが俳諧的な連想や、語が持つイメージの上で「狂気」に結びつくことを指摘する<sup>30</sup>。

筆者は、広嶋氏の主人公が「一貫して日常の秩序・規範とは反対の世界にいる」という

指摘や、長尾氏の主人公が発狂以前から「狂気」を帯びた人物であるという指摘に賛成である。けれども、いささかの疑問もある。それは、放蕩を繰り返した挙げ句、やがて「狂人」（下巻）と化す主人公の異常性の悪化が、作品世界においてどのように映し出されているのか、という点である。なお、こうした点について広嶋氏は、次のように述べている。

椀久は終始一貫、非日常的な世界に所属する人間として行動する。彼は、上巻では、

大坂の中心地（日常）と周縁地（非日常）を往復することによって、また下巻では、周縁地（非日常）に居住することによって、消費の種々相を展開し、自滅していく。したがって作品全体に描かれているものは、始末（日常）と対立する浪費（非日常）の諸相であり、非日常的な存在やもの（主人公・浪費）が、やがて自壊していく過程である。

主人公の有する財力が「わづか有銀七百六十貫目余」（上巻の一）であるように、「つかい

はたす」という繰り返される浪費行動は、氏が指摘するように主人公の「自壊していく過程」を映し出すものである。しかし、「つかいはたす」という異常な浪費行動を繰り返すことと、「むしやうといふ男」から「狂人」への精神異常の悪化は、必ずしも結び付かないように思われる。一方、長尾氏は、「狂気」の肥大化といった点については言及していない。また、前出の白井氏も、主人公の死を異常性の悪化といった観点からは言及されていない。

上述したように、本書のモデル小説という特性や、「因果応報譚的構想」の事実を考えると、西鶴の関心は主人公の死の要因を描くことにあったはずである。つまりそれは、「むしやうといふ男」と評される主人公が、如何なる変遷を経て「狂人」と化し、水死（狂死）に至ったかという、その異常性の悪化（「分別・判断力」の低下・「狂気」の膨張）を描く

ことであつたはずである。

そこで次節では、主人公椀久の異常性の悪化が、如何なる方法によって映し出されているのかを検討する。

## 二 異常性の正体

主人公の異常性は、「つかいはたす」という浪費行動や、「否定住」・「放浪」という行動に現れている。こうした異常な行動を主人公が繰り返すことは、始章において彼が弁才天から財を授かる場面に暗示されている。主人公は、弁才天から蔵の鍵(財力)を授かると、「色町の諸分よくつかひ捨てん」と発言する。この発言に対して弁才天は、主人公が「今



より富貴にならぬ身」であると言い、「傾城ぐるひを必ずとまるべし。やめずは末々絵筵折か道心者になるべき」と忠告する。しかし、主人公はその忠告を聞き入れず、さらに次のように反論する。

人によりて始末を元として、一代身には絹の下帯をかかず口には魚鳥の味をおぼえず、道頓堀役者の顔をも見知らず、新町筋は順慶町を西へ行くも、東高津に景清観音があるも、天王寺の彼岸ざくらは春咲くやら、生玉の荷葉秋見るやら、谷町の藤見も、川口のはげ釣も(中略)、住吉の汐干遊びも(中略)、提重といふものは公事宿で見はじめ、鼓の音はありきやうがりに聞覚え、蠟燭の火は余所の葬礼の時ならでは見ぬ男、世間の義理もかまはずに小銭をためて、是れ大黒殿の守り給ふより仕合せ、いや天女の御めぐみと、とうとがる人と、此大尽など一つ事におぼしめさるるが違ひ

弁才天を前にして右のように発言と反論した主人公は、その後、「伏見屋の雲川」（上巻の二）を皮切りに「傾城ぐるひ」を開始する。その結果として、「今より富貴にならぬ身」である主人公は、破産し（上巻の七）、弁才天の忠告の通り、花筵織りになり（巻下の一）、出家の身（巻下の四・六）となる。この話の展開について広嶋氏は、「予言とその実現」と指摘する。さらに氏は、右に取り上げた主人公の長々とした反論から、「飲食」「若衆遊び」「遊里遊び」「寺社参詣」「花見」「住吉」「谷町の藤見」といった行為や地名を抽出し、後に主人公が当該行為や場所に赴き財を浪費する（「つかいはたす」）ことを指摘している。つまるところ、主人公は「傾城ぐるひ」を思いとどまるよう忠告した弁財天への反論の言葉の中に、多くの遊興、地名を挙げ、後にそれを実行・移動するように、当該場面は主人公の人物像（「つかいはたす」、「否定住、放浪」）を表示する場面であると言え

よう。

さらに、当該場面には注目したいことがもう一点ある。それは、主人公が弁財天から「今より富貴にならぬ身」と忠告を受け、自身が「人によりて始末を元として」と言うように、町人規範といったものを知った上で、その後、忠告・規範に反する行為をするという点である。弁財天の忠告、自身の発言（町人規範）と、その後の対立的行為の実行という事実を念頭におけば、主人公は認識と行動の一致しない、混乱した人物であると言える。そして、それが形となって現れたのが、「つかいはたす」、「否定住、放浪」といった行為であると言える。

もつとも、筆者の言う混乱とは、日常と対立する非日常行為であるように、広嶋氏の主人公が「通常の「積り」や「判断・分別」の外に存在する人間」であるという指摘や、長

尾氏の主人公が「狂気」を帯びた人物であるという指摘と、変わるものではない。しかし、相違する部分もある。それは、日常的認識が示された上で、対立する非日常行為が出現するという点である。そうした認識と行動の不一致が見て取れる明確な例として、次のような部分をあげることができる。

①主人公は、遊里での遊びに「うかうかと思ひ捨てたる銀知つた人もなし」という出鱈目さであるにも関わらず、その後、寺への寄進を「仏の事ながら時分がらの事なれば」と言い訳して、「銀子二匁」に留める。(巻上の二)

②主人公の妻は「さほどふびんとおぼしめさるる御事ならば、外の人のなぐさみになし給ふも云甲斐なし、けふのうちに受出し、下屋敷に置かせられ、かよひ女にあそばせ」と言い、その費用として主人公に「一歩物數四百」を手渡す。すると主人公は、それ

を「嬉しげに」受けとるも、「其一日に何にした事やら、跡かたも」なく使い果たし、松山を請け出し損ねる。(上巻の七)

③「我れ住吉へまいるなれば、三挺借らんと云ふ。御一人にいかかと申せば、それが昔しのまだすたらぬ大尽を知らぬかと乗りて」(巻下の五)

④「椀久笑うて、しやつら二つに、刀握れば覚えありと、竹杖をすりと抜けば、まことの事と思ひ、かたへの物の短気にて抜合はずを」(下巻の六)

①の例では、主人公の出鱈目な浪費行動が語られた直後に、寺への寄進を理由を付けて渋るという打算的な様子が映し出されている。主人公の非現実的行為と現実的認識の行き来という言動の不一致が映し出されているよ。

②の例では、主人公の「つかいはたす」という浪費行動が見て取れるが、その浪費した

財は、妻より松山を請け出すために手渡されたものである。「つかいはたす」という行為そのものが異常なものであるが、財の目的外使用でもあるように、主人公の混乱が二重に映し出されていると言える。

③の例では、長尾氏の指摘する「狂気」と結びつく「放浪」が見て取れるが、主人公は一人であるにも関わらず、駕籠を三挺借りるといふ矛盾した行動も見て取れる。①②のと同様、主人公の混乱が二重に映し出されていると言える。

④の例では、遊びに興じる大尽を相手に「しやつら二つに、刀握れば覚えあり」と発言するが、手に持つのは真剣ではなく「竹杖」であるように、言動が一致しておらず、その行為には混乱がみられる。

以上のように、主人公の認識と行動の一致しない行為は物語の随所に見られる。主人公

の異常性の実相が認識と行動の不一致であることは、「しれぬもの」(下巻の四)と化した主人公が、「夜はうつつに明方ありきて、昼は日影見ず臥」すという昼夜の逆転した生活を送り、さらにこの様子を「是ぞ世界の島はづれに住みし、夜を昼にする国のごとくなりぬ」と評した言葉がよく表している。つまり、主人公は弁才天より「今より富貴にならぬ身」と忠告を受けていたにも関わらず、浪費を繰り返して破産する、契りを交わした松山を請け出す費用を持ちながらも、それを他事に使い請け出し損ねる、そして大尽を前にして刀を持っていないにも関わらず、「刀握れば覚えあり」と発言したことが原因で命を落とすといったように、本書は主人公の認識と行動の不一致という混乱を描いた物語であると  
言える。

### 三、各章の関係①

認識と行動の不一致という主人公の混乱は、一章（一話）の中に出現するだけではなく、始章から終章に至る隣接する章（二話）にも出現する。

さらに、その詳細な出現位置と場面については後述するが、作品中央の上巻の七を境とした上巻と下巻の二つの話（二章）<sup>3</sup>、上巻内部における上巻の四を境とした前後の二章、下巻内部における下巻の三を境とした前後の二章における主人公の認識と行動の不一致には、相関関係が存在し、後の章（話）では主人公の混乱の悪化が見て取れる。そして、こうした規則的な位置に出現する相関関係によって、主人公の段階的な混乱の悪化が映し出されている。



まず、隣接する章における主人公の認識と行動の不一致の要点から見てみよう。

(巻上の一・二)

・主人公は蔵から財を取り出すと、帳面に記録する。しかし、「是に付くるもいまだ弱きさわぎ」であり、「人に取らした物の返る事にもあらず」と思ったことから記帳するのをやめて、その後は自由に使う。(巻上の一)

・主人公は「親代からの宿坊」の僧侶に「本堂の上葺」に掛かる費用の寄進を依頼されるも、「仏の事ながら時分がらの事なれば」と言い訳して、「銀子二匁」の寄付に留める。(巻上の二)

※主人公は財の消費を記録することを「いまだ弱きさわぎ」と考える一方で、後に、寺

への寄進を躊躇する。

(巻上の二・三)

・(巻上の二の場面については、右の(巻上の一・二)を参照)

・主人公は旅役者の花川順之助の貧しい暮らしぶりに同情し、「物数奇」にも家の「普請」を「我等にまかせ」と言う。(巻上の三)

※主人公は「親代からの宿坊」の「本堂の上葺」の葺き替えのための寄進を躊躇する一方、後に、花川順之助の家の「普請」を「物数奇」にも約束する。

(巻上の三・四)

・主人公は家普請の準備に取りかかり、その様子を見回っていると、遣手の久米に出会

う。久米は太夫が主人公に逢えないことを悲しんでいると伝えると、主人公は「泪もろく」、家普請のことを忘れ、すぐさま新町へと向かう。(巻上の三)

・主人公は、松原屋の初花に逢うも、「間もなく落花心になりて」しまう。相手の太夫も「よはからず」、手紙すら送られてない有様で、主人公は「俄に求める恋もなく」なる。(巻上の四)

※主人公は遊女に「泪」を流すほどの愛情を示すが、後に、愛情を失う。

(巻上の四・五)

・暇を持てあました主人公は、まだ桜を見ていない人のために、花の付いた枝を持って

きたという禿の話しを聞いて、「誠に昔男の植へ置きし名の桜、散らぬうちに見に行かぬか」と言う。(巻上の四)

・主人公は金さえ貰えれば世に珍しいものをすぐに買いそろえて見せると言う言葉を聞くと、季節外れにもかかわらず、「金銀で叶ふ物ならば、只今御所柿と楊梅喰はふ」と言う。その後、主人公は「紅葉を秋に見、蛩を夏飛ばすは世間にある事おかしからず」と発言する。(巻上の五)

※主人公は春の桜を楽しむが、後には、季節の出来事を季節通り楽しむことを退屈であると否定する。

(巻上の五・六)

・「物好み」が強くなった主人公は、四月であるにもかかわらず、正月行事をして遊ぶ

ことを「昼過ぎより申出して、俄に」吉田屋の亭主や遊女、幫間に準備をさせる。(巻上の五)

・主人公は遊女に切らせた髪を高野山に納め、「いまだ浮世にある人を弔」うことを思いつく。高野山にたどり着くと、遊女たちに「よしなき難義」を掛けてきたことを振り返り、心を入れ替える。帰り道では同行の分も含め、駕籠があるにもかかわらず、「わが身助かればとて、人の苦しみ」と言い、皆を歩かせる。(巻上の六)

※主人公は突如として思いついた正月遊びのため、人を使うが、後には、高野山参詣の帰り道、人に苦勞を強いてはならないと語る。

(巻上の六・七)

・(巻上の六の場面については、右の(巻上の五・六)を参照)

・主人公はいつのまにか財力を使い果たし破産する。その後、妻も「よろづ云はで思ひとなり」命を落とす。この出来事に主人公は「哀れを知りて、捨つる身となりて、其後は彼里へも往かず」に過ごす。(巻上の七)

※主人公は「いまだ浮世にある人を弔」うが、その後、妻が亡くなり、悲しみに明け暮れる。

(巻上の七・巻下の二)

・(巻上の七の場面については、右の(巻上の六・七)を参照)

・主人公は「悲しき中にも色はやめがたく、上町に名のありし風流女の久米を云へるを更に又呼入れて」暮らす。

(巻下の 一・二)

・破産した主人公は、自身の過去を知る妹背に「江戸」に稼ぎにでることを進められ、旅費として一分金十五枚を受けとる。すると、「追付江戸より此返しを、きつさりと申すべし」と言い、すぐさま旅支度をする。(巻下の 一)

・主人公は江戸へ稼ぎに出るべく大坂を出発したはずであるにも関わらず、出駕籠を見つけると「淀まで約束して」そのまま向かう。(巻下の 二)

(下巻の 二・三)

・主人公は昔の友人から少しの援助を受けるも、そのすべてを飯蛸や玉子の購入に使い、

薄鍋を掛けて「是より外のたのしみなく暮らす。その質素な暮らしから「此心を世間寺の出家に持たせたらば、来世に導かるる人も仏になるべし。殊勝なる身持ちぞかし」と評される。(下巻の二)

・主人公は友人の惣八がひとり新町の夜見世に行くのを「うらやみ」、その後をついて行く。その途中で、荘八に声を掛け、「我も色里へ行って、久しく見ぬ女郎をかりの慰み」と言い、ともに吉田屋に入る。(下巻の三)

※主人公は「殊勝なる身持ち」と評される暮らしを送るが、その後、遊里に向かう友人を「うらやみ」、自身も同伴する。

(下巻の三・四)

・主人公は吉田屋で同席した遊女に、かつて自身と契りを交わした「松山」が悲しみに



暮れていたことを聞くと、赤面して店を飛び出す。その後、惣八が主人公を見つけ、

「何ださきへ帰りけるぞ」と聞くと、「忽ち狂人となつて、思へば此鐘うらめしや、

ひとへの日は又日和よかれ」と訳の分からないことを語り始める。惣八は主人公を「やうやう捕へて宿に帰」る。(下巻の三)

・ある夜、主人公のもとに「下女つれい女」が訪れる。女性は主人公に「さまざま昔しを語りなぐさめ」るが、当人は「是には返事もせず、蝨に酔をかけて、思ふまま」と言い寝込んでしまう。女性は主人公を眠りから覚まそうとするも、「遂に夢」から覚めることなく、「是なれば、何を云ふてもせんなし。又も首尾のあらば相見る事もと、云捨てて帰」る。(下巻の四)

※主人公は松山の名を聞き、過去への後悔から「狂人」と化し、意思疎通か不可能とな

る。その後、「下女つれし女」が、主人公を「なぐさめ」るも、眠りに就き意思疎通が不可能となる。

(下巻の四・五)

・主人公は出家する際、住職に懺悔することを促され、「浮世の思ひ出に、只今髪を剃らぬうちに、習ひ置きし、三百両踊りを」と言い、それを披露する。(下巻の四)

・乞食坊主となった主人公は、「御ぞんじの坊主、はちはち。浮世じやな、はちはち。

むかしじやな、はちはち。こりや五百貫目入れて、揚げやで習ふたなげぶし、一文で

歌ふて聞かすが」と言いながら町を徘徊する。(下巻の五)

## (下巻の五・六)

・主人公は、「芝居帰りの若衆」を見かけると、「袂かざし」顔を隠す。それを見た人が何をしているのかと尋ねると、主人公は「あの若衆に近き頃まで逢ひぬれば、あの子が名の立つ事の思はれて」と言う。その様子から「此身に成りても、恋の道の忘れぬ事のおかし。」と評される。(巻下の五)

・主人公は「舟の苔葺を引まくりで」、大尽に「女郎のお名を聞きたい」と言うと、大尽は「腹立して、我が物数奇にて鼻毛よまれて遊ぶに、おのれにかまふ事か」と言う。

## (巻下の六)

※主人公は若衆の名に傷が付かないように配慮するが、その後、見知らぬ大尽の恋の邪魔をする。

右に取り上げたように、隣接する章のすべてが、主人公の認識と行動の一致しない混乱した行為によって鎖のように連接されている。「椀久二十七の春」（上巻の一）から「三十の暮れの年」までの出来事を記した作品世界には、主人公の混乱によって、一つの時間の流れが創り出されていると言える。

次に、上巻の四、上巻の七、下巻の三を境とした前後の二章（二話）における主人公の混乱の相関関係を見てみよう。

#### 四 各章の関係②

前述したように、二章における主人公の認識と行動の不一致には相関関係が存在し、それが確認できる位置には複数のパターンが存在する。その一つが、主人公が破産する上巻の七を境とした発端と末尾からの二章（巻上の二と巻下の六、巻上の二と巻下の五といった具合）である。二つが、物語の発端（上巻の一）、転換点（上巻の七）、末尾（下巻の六）を除いた上巻と下巻の先頭からの二章（巻上の二と巻下の二、巻上の三と巻下の二といった具合）である。三つが、上巻内部と下巻内部の前半と後半の二章である。具体的に言うと、上巻では第四章を境とした第二章と第六章、第三章と第五章である（物語発端の上巻の一と、転換点である上巻の七は除く）。下巻では、第三章を境とした第一章と第五章、第二章と第四章である。構造の観点からすると、上巻の四と下巻の三は、上巻の七と同じく、その前後の章における主人公の言動が相関関係で結ばれているように、物語の転換点であ

ると言える。もつとも、構造の観点だけでなく、二章には転換点であることを示すかのような「銀さへあらば、浮世思出に、あの身になりて、何事も夢の春なれや、飛蝶それも夢」（上巻の四）、「忽ち狂人となつて」（下巻の三）という不穏な描写が見られる。また、巻上の四については、章題が「花車は引れてのぼりづめ」であり、登り切った先が下りの路であるように、これも物語の転換点であることを暗示しているかのようにある。

前置きが長くなってしまったが、右の三つ出現パターンにおける主人公の混乱の相關関係をみてみよう。また、叙述が緩慢となることを避けるため、主人公の認識と行動の不一致のうち、行動の部分しか取り上げていない章があることを断っておく。

(1) 先頭と末尾からの二章

(上巻の一と下巻の六)

・主人公は参詣を終えて客殿で眠りに就くと、夢中に弁才天が現れ、「蔵の鍵」を授けられる。主人公は「夢心にもありがたく、思ひの外なる金銀、大ぶんの主となりて、色町の諸分よくつかひ捨てん」と語るうちに夢から目覚める。その後、家に戻ると、庭木に蔵の鍵がかかっているのを見つけ、「是は争はれぬ靈験と喜ぶ」。(上巻の一)

・大和屋甚兵衛が主人公に望みを尋ねると、「紙子紅うら付けて、物まねをする事ならば、其外に願ひはなし」と言う。甚兵衛はすぐさま望み通り用意を調べ、主人公が訪れるのを待つが、「其後は面影も見えず」となる。(下巻の六)

※上巻での主人公は、夢中でのよき出来事を現実世界に戻った後も記憶している。一方、下巻での「狂人」と化した主人公は、現実世界でのよき出来事を失念する。

(上巻の二と下巻の五)

・主人公は「親代からの宿坊」の僧侶に「本堂の上葺」に掛かる費用の寄進を依頼されるも、「仏の事ながら時分がらの事なれば」と言い訳して、「銀子二匁」の寄付に留める。(上巻の二)

・乞食坊主となった主人公は、「さてはせけんがつまつたよ五文の錢をくれぬからは」と嘆く。その後、昔の友人を見つけ、「一角」を貰い「大尽はづみか」と喜ぶ。(下

巻の五)

(上巻の三と下巻の四)

・主人公は順之助と約束した家普請のために「長堀より杉・檜木の柱ごのみして、あま



たの番匠を集め」準備に取りかかる。その様子を見回っていると、遣手の久米に出会い、彼女にそそのかされ、新町へと向かう。その後、順之助と家普請のことは「思い出しもせず」放置される。(上巻の三)

・主人公は友人に勧められ出家する。その後、「草庵借りて、友とせし人、有増の仏棚をもつらせ置きしに此庵の入口わすれで、其後は宿をも定めず、行なり川なりに、長堀の材木の上に臥しける。」(下巻の四)

(上巻の四と下巻の三)

・「腕久前にてときあけしに、藤・山吹の花車に色々のかざりを尽し、中にうづだかき

円座を敷て、此大尽を乗せて、五色の唐房をつけて、十二人の美少女、是にてをかけ、小歌さまさまの音曲にて、五十丁の坂を引登れば、あたら桜も此色にまけて、けふ更に見る人もなし。心ある者は、間もなく其身のすたるべき事をなげきぬ。」（上巻の

四)

・「つかひ捨てたる金銀の惣高、合せて見て、今あらば見事なさはぎすべきに、何をひとつ名の残る勘定もなしと、云ふ声聴けば、腕久なり。何とてさきへ帰りけるぞと云へば、忽ち狂人となつて、思へば此鐘うらめしや。ひとへの日は又日和よかれ。やろか信濃の雪国へ。（中略）今度天よりふりくだる、此下帯は有難や。云ふ事一つも埒あかず。やうやう捕へて、宿に帰りぬ。」（下巻の三）

※全盛時（上巻）の主人公は、吉田屋から花見へと向かい、花車に乗り、それを禿に引か

せ坂を登る。一方、零落（下巻）した主人公は、友人について行き吉田屋に上がるも、同席した遊女から松山の心境を聞き、居たたまれなくなり、店を飛びだす。その後、発狂した主人公を友人が見つつけ、連れて帰る。

（上巻の五と下巻の二）

・「そのうちに、八助才覚らしく、柘をさして、子細らしき顔つきをするを見て、（主人公が）何ぞと問へば、座敷ふさげの砂になる客の目鼻つかせて寄せぬためと申す。是又おかしや」（上巻の五）

・「此事（主人公が破産したという事実）を知らず、京の島原より差引の残銀取りにまかりて、此事ばかりに此度くだれば、是非に埒あけてのぼる心ざしにて、此宿にたずね

て、此やうす見て、申す事は借置き、錢五百・ふとんまいらせて、揚屋の男は都へ帰りぬ。色は色知る下々までやさし。」(下巻の二)

(上巻の六と下巻の一)

・高野山に参詣し、心を入れ替えた主人公は、その帰路、駕籠を用意しながら「わが身助かればとて、人の苦しみ」と言い、堺の港まで歩く。堺の橋を渡るとき、遊女を見かけると、「腕久俄に鬢をなでつけ、はしをりをおろし、すぐに天王寺屋利兵衛方へ行きて」遊びに興じる。(巻上の六)

・「上町に名のありし風流女の久米と云へるを、更に又呼入れて、久米のさら山さらさら其日暮しに、互に情の深き手釣瓶を汲みあげ、薪を小割にして共かせぎ、是も程な

く気をつかし、一軒の家を心当に、遂には十三貫目に売りて、此銀も廿日余りに皆になして」(下巻の一)

※全盛時(上巻)の主人公は、高野山に参詣すると心が入れ替わり、他人の苦勞を気に掛けるようになるが、遊女を見ると元の浪費家に戻る。一方、零落(下巻)した主人公は、私娼を呼び入れて苦樂を共にするが、それもすぐに飽きて、浪費家に戻る。

(2)上巻の二と下巻の一から以下の二章

(巻上の二・巻下の二)

・主人公は「夫婦いさかひ」の様子を目撃し、「今のいやなること思へば、騒ぎ中間の若き者には、一代持たすべきものにはあらず」と思うに至る。(巻上の二)

・零落した主人公は、「悲しき中にも色はやめがたく、上町に名のありし風流音の久米と云へるを、更に又呼入れ」る。しかし主人公の浪費が原因で暮らしが行き詰まり、それが元で夫婦げんかが生じる。(下巻の一)

(上巻の三・下巻の二)

・主人公は、順之助と約束した家普請の工事を見回っていると、遣手の久米に出会う。久米は、太夫が主人公に逢えないことを思い悩んでいると言うと、主人公は「袖に彼の家普請の入銀持ちながら」、遣手とともに新町へ向かう。その後、主人公は「順之助事」を忘れ去る。その後、「怨みて甲斐なく、歎きてとどかず、公事にはならず、

此家すみせぬさきに荒れ」果てる。(巻上の三)

・住居を失った主人公のために、「惣八才覚して、藤の柵の西がは、すこしの裏屋を借り」る。主人公は、その裏屋で質素な生活を送っていると、京の嶋原より男が「差引の残銀」を回収に訪れる。男は主人公の零落した姿を見ると、「申す事は儲置き、錢五百・ふとん」を置いて帰る。この出来事が「色は色知る下々までやさし。是れ浮世にある盗人におひと云ふとは、違ふたる事ぞかし」と評される。(下巻の二)

※当該二章では、住居の手配という行為を軸に、主人公と他者の関係が相対化されている。また上巻の主人公と、下巻の島原から訪れた男の行為(「入銀」・「残銀」、「怨み」・「やさし」)が相対化されている。

(上巻の四・下巻の三)

※当該二章については、上述の「先頭と末尾からの二章」を参照。

(上巻の五・下巻の四)

・「それよそれよ餅花して柳にやりしもきのふ、けふの慰みには、九軒の吉田屋で、正月事して遊ばんと、昼過ぎより申出して、俄に裏口に松立て飾り、新しき羽子板・手鞠、女良あまたの庭遊び、亭主は袴肩ぎぬ着て礼に出る。」(巻上の五)

・「此男、親もなし、子もなし。金もなし、元より智慧もなし。然も世に見限られ、是非にかなはぬ俄後世に思ひよるなれば、詮議もなく、坊主になして賜はれとの添状持ちて、彼の寺に往きぬ。」(下巻の四)



※全盛時（上巻）の主人公は、他者に手配させ正月行事の真似事をする。一方、零落（下巻）した主人公は、他者に「俄後世」になるよう進められ、その手配をしてもらう。

（上巻の六・下巻の五）

・一晩中、賭け事を楽しんだ主人公は、その帰り道、「女乞食」に出会う。女性は主人公に「一錢くねてお通り」と言う。主人公は、「最前勝ちたる三百文取出し、是を残らず取らすべし」と言い、その代わりに「我がくる髪は迎も捨る物なれば、切てくれよ」と願う。女性は、「こなたに何の訳あつて、髪切りてまいらすべし」と言い、「三百文」を投げ返す。すると主人公は、「一たび乞人の手に渡りし錢」であるからという理由で、その錢を「大川に捨て」る。一部始終を見ていた主人公の「友とせし人」

は、「これぞ国土の費」であるとして「腕久を叱」る。(巻上の六)

・乞食坊主となった主人公は「はき物切れての此の仕合せ。錢五文の奉加奉加、はちち」と言いながら町を歩くが、援助を受けられず、「さてはせけんがつまったよ五文の錢をくれぬからは、はちはち」と嘆く。主人公は日本橋を渡ると、「過ぎし頃悪所の友」を見かけ、彼が履いていた「とろめん足袋」を所望する。友人は足袋を脱いで渡すと、主人公は「今すこし大きな」と言つて、「手に取るより捨て」る。友人は「それも心まかせにして」、さらに主人公に「一角取出してわた」す。それを主人公は「大尽はづみか」と言い、受けとる。(巻下の五)

※当該二章では、主人公・乞食・友人の言動(施す・施される、投げ返す・受けとる、叱る・自由にさせる)が相対化され、主人公の異常性が映し出されている。

(3)各巻内部

(上巻の二・六)

・主人公は、自身の元を「はるばる」尋ねてきた「親代からの宿坊」である寺の僧侶から、寄進の依頼をされる。けれども「仏の事ながら時分がらの事なれば」と言い訳して、わずかな金額の寄進に留める。僧侶はそれを受けとると、「龍田の紅葉の頃、かならず泊りがけに御越し」と言い、帰っていった。(上巻の二)

・主人公は、遊女が髪を切り、それを客に渡すという行為を客の心を引き留める手段だと思っていたが、「誠ある心根」であると思うに至る。そして、「今まで切らせたるあまたの髪」を取り集めて、「高野山に納めんと思立ち」、「いまだ浮世にある人」を

弔うために出発する。(上巻の六)

※主人公は親の代から世話になっている宿坊への寄進を渋る一方で、その後、存命の人物を弔うため、自ら参詣へと向かう。

(上巻の三・五)

・主人公は遊びの間に合わせのつもりで、旅役者の花川順之助のもとを尋ねる。主人公は亭主と雑談していると、その間に鼻が順之助を「太夫」の姿へと「まんまと仕立」てる。順之助は「ひさしぶりで、是れの太夫が御目にかかります」と言うと、主人公は彼の浮かばれない様子から「慰さみは外」になる。(上巻の三)

・主人公は季節違いであるにも関わらず、「九軒の吉田屋で、正月事して遊ばん」と思

い立つ。吉田屋の人々は「俄に裏口に松立て飾り」つける。遊女は、「新しき羽子板

・手鞠」で遊び、「亭主は袴肩ぎぬ着て礼に出る」。そして主人公は、「年男勤むる」

と言い、両袖に一分金を入れて、「鬼は外、客は内へと、打散らす」。(上巻の五)

※当該二章では、変装という行為を軸に、主人公の興ざめ・楽しむという感情が相対化されている。順之助は生活のため変装し、一方、主人公は遊びのため変装し、財を浪費する。

(下巻の一・五)

・「此女わたりに舟、中津川の親里に帰りぬ。」(下巻の一)

・「それより毎日衰れ知る人にもらひし物、其限りなきを手にとらしければ、腕久に付添て、あまたの袖乞つきまはりて、其日をゆるゆるおくりぬ。」（下巻の五）

※下巻の一では、主人公の浪費に愛想を尽かし女房が主人公の元を離れる。一方、下巻の五では主人公の浪費に目を付けた乞食が集まる。

（下巻の二・四）

・住居を失った主人公のために、「惣、才覚して、藤の柵の西がは、すこしの裏屋を借り」る。主人公は、その裏屋で質素な生活を送っていると、男が京の嶋原より「差引の残銀」を回収に訪れる。男は主人公の零落した姿を見ると、「申す事は借置き、銭五百・ふとん」を置いて、「都へ帰」る。（下巻の二）

・ 出家した主人公は、「東高津に近き塩町と云ふ所に、草庵借りて、友とせし人、有増の仏棚をもつらせ置」く。しかし、この住居の位置を忘れ、「其後は宿をもさだめず」暮らす。その主人公のもとへ、「ある夜、下女つれし女」が訪ねて来る。女性は主人公に昔を語り慰めるも、主人公がは眠ってしまったため、「何を云ふてもせんなし。又も首尾のあらば相見る事もと、云捨てて帰」る。夜が明けて主人公が目を覚ますと、女性が置いていった「黄八丈に紅うらの女着物」と「氷砂糖」に気がつき、「此着物は捨てて、砂糖うれしく、楽し」む。(下巻の四)

※当該二章では友人が主人公の住居を手配することが共通している。加えて、生活に困窮した主人公に物資を援助する人物が登場することが共通している。しかし、後半の下巻の四では、援助物資の一部を捨てるといふ主人公の異常な行動が出現する。

以上、右に取り上げた章の組み合わせパターンにおいて、主人公の認識と行動の不一致という混乱の相関関係が確認できる。この綿密な構成からは、本書が主人公の混乱を描いた物語であるという事実が読み取れよう。

## 五 小結

本章では、『椀久一世の物語』の主人公椀久が、物語後半から結末にかけて「狂人」と化し、自己の異常行動によって命を落とすことに注目し、主人公の精神異常の悪化を描いた物語であると想定して、それが如何なる方法によって映し出されているのかを検討してきた。



「むしやうといふ男」や「狂人」と評される主人公であるが、その異常性の真相は、認識と行動の不一致という混乱であった。そうした主人公の混乱した言動は、一章（一話）だけでなく、始章から終章に至る隣接する二章にも出現している。すなわち、主人公が弁才天より授かった財力を自己の混乱した判断により浪費を開始する始章から、「しやつら二つに、刀握れば覚えありと、竹杖をするりと抜けば」という混乱した言動がもとで命を落とす終章まで、各章は主人公の混乱した行為によって鎖のように連接されていたのである。この混乱の連鎖は、前出の白井氏が本書における「因果応報譚的構想」を指摘するように、弁才天を契機とした財の獲得、散財、破産、松山との離別、狂人化、水死という個々の出来事を結ぶ、言うなれば運命の鎖である。

そして、上巻の四、上巻の七、下巻の三を境とした前後の章における主人公の混乱した

行為には、相関関係が存在していた。この三章を境とした前後の章における主人公の混乱した行為に、相関関係が存在するということは、物語が進むにつれて、既視感のある混乱した行為の出現頻度が高まることを意味する。たとえば、上巻の二における主人公の行為を中心に見れば、巻上の一における行為と関連があるのみである。一方、物語終盤の下巻の五であれば、上巻の二・六、下巻の一・四と関連がある。つまり、当該三章を境とした主人公の混乱した行為の相関関係とは、過去と現在の境遇を対比するものであり、かつ、物語が進むにつれて過去と現在の重なりが増すことによって、認識と行動の不一致という異常な実体を浮かび上がらせる構造なのであり、主人公の異常性の段階的悪化を映し出しているのである。

以上、結末で命を落とす主人公の人生は、財力の獲得、散財、破産、松山との離別、狂

人化という具合に、転落の一途を辿る。この人生の転落は、自己の認識と行動の不一致という混乱が原因であったように、各章における主人公が経験する出来事は、混乱によって連接されている。さらに、その混乱する姿を物語の進行とともに、既視感という形で重ねていくことによって、自己の混乱によって死すべき運命にある、その混乱の悪化が映し出されていたのである。

なお、従来、主人公の異常性は、「つかいはたす」という行為や、「否定住、放浪」といった行為が注目されてきたが、その実相は、認識と行動の不一致であり、不一致として表出したものが当該行為であったのである。

\* 一 本文の引用は、麻生磯次・富士昭雄訳注『決定版対訳西鶴全集 四』（一九九二年 明治書院）に拠った。旧字体は適宜、現行の通行字体に改めた。

\* 二 中野真作「「椀久」考」（『国文学』37、一九六五年1月）氏は、円徳寺の過去帳の記述から、本書のモデルと思しき「椀屋久右衛門」が「延宝四年六月二十一日」（一六七六年）に没していたことを指摘している。

\* 三 白井雅彦「『椀久一世の物語』考一」（『二松学舎大学人文論叢』43、一九九〇年1月）

\* 四 例えば笠井清氏は、「私は、この物語が、椀久という性格異常児の栄華と零落の一代の浮沈の諸相を巧みに描きつつ、その間に蕩児の通有性のみでなく、椀久独自の特殊な姿態や心理を彷彿と描き出し、かなり複雑で陰影に富む性格悲喜劇を呈しているところに

高い評価を付与して然るべきであると信ずる」と述べておられる。(同氏『椀久一世の物語―評釈と論考』)(明治書院、一九六三年)

\* 広嶋進 「『椀久一世の物語』の構成」(『国文学研究』84、一九八四年十月)のち、同氏『西鶴新解 色恋と武道の世界』所収(ぺりかん社、二〇〇九年)引用は後者による。

\* 長尾三知生 「『椀久一世の物語』における狂気」(『西鶴の出發』所収、私家版、一九八八年)また、長尾氏は、「狂気」を表示する行為として、広嶋氏が「つかいはたす」という消費行動を指摘するのと同様に、「贈与」という消費行動を挙げている。

\* 笠井氏(注4同書)と広嶋氏(注5同書)は、上巻と下巻における同一の場所において、主人公の言動が相対化されていることを指摘している。この相対化が意味するところにつ

いて広嶋氏は、次のように指摘する。

さらにまた市街地、近郊地において、金品を消費する舞台として重複して登場する場所がある。(中略)これらは一度目は上巻、二度目は下巻に見られ、上巻内、下巻内では重複していない。これは同一の場所で、明暗の異なる消費行為を主人公にさせることによって、主人公の境遇を対比させようとしたものであろう。

なお、上巻と下巻に出現する同一の場所として笠井氏は、吉田屋(上巻の五、下巻の三)、長堀町(上巻の三、下巻の四)、住吉(上巻の六、下巻の五)を挙げ、広嶋氏は、浮世小路(上巻の一、下巻の三)、新町橋(上巻の三、下巻の三)、堺筋(上巻の六、下巻の五)を挙げている。しかし、両氏は、筆者が指摘する異なる場所における主人公の言動の相関関係については言及していない。

## 第二章 『好色一代女』における「二項対立」構造の再検討

### 一 先行研究

『好色一代女』（貞享三年〔一六八六〕年刊）<sup>1</sup>は、論者によって異なる読みが試みられてきた作品である。暉峻康隆氏<sup>2</sup>は、主人公を弱者と捉え、「この作品における西鶴の第一のテーマは、商品化されざるをえない女の性の悲劇を告発するということにある」と読み解いた。一方、谷脇理史氏<sup>3</sup>は「「美女」一代女は、平然とたくましく、時には「命を断つ斧」であることを自負するかのごとくに生き続けていく」と主人公を強者と捉え、作品を

喜劇と読み解いた。

悲劇と喜劇という相反する読みが注目される中で、長尾三知生氏<sup>4</sup>は『好色一代女』を「性の過剰」と「性の欠如」という二つのモチーフが対立する世界と捉えた(氏は「二項対立」と述べる)。さらに氏は、一つのエピソードが主人公の追放によって締めくくられることに注目し、「《欠如》《過剰》《追放》というモチーフはそのいずれもが、安定した秩序を脅かす不安定要素を持っている」と述べ、「主人公の人生は、いわば文化秩序、日常生活の破壊者として、定着を拒否され日常的秩序の世界から追放されなければならない人生である」と読み解いた。

森耕一氏<sup>5</sup>は、長尾氏の研究成果を「画期的な発想」と評価しつつも、「『過剰』と『欠



如」は、人物と人物との組み合わせを変えることによって無限に互換し得る概念であり、あくまで相対的な概念でしかない」と指摘し、二項対立の主体を前出の谷脇理氏が着目した男女の対立<sup>66</sup>と想定して分析を進めた。その結果、多出する男女の対立の構図に「女優位・男優位の性差による固定した力関係・階層的秩序は存在しない」ことを確認し、終章（巻六の四）の主人公が五百羅漢像にかつて関係を持った男たちの面影を見出し、彼らの死という現実を認識する場面において、「男女の対立関係と力による階層的秩序」の「解体と解消」を指摘する。そして直後の主人公が命を絶とうとするも、引き留められるという展開を通して「ここに加害・被害の二つの性による対立と、その反復による性差の消失、そして、その先にある融和のモメントを読み取るべきであろう」と指摘する。

森氏の研究によって、二項対立の世界という作品理解は、説得力を増したものと筆者は考える。しかし、依然万全でないとも思う。それは、氏が当該論考初出時に述べていた次のことにある。

ただし、『一代女』は対立から融和への物語ではなく、女優位・男優位の話が並列されてきたように、ただ単に、対立と融和の物語が並列されているだけである。

氏は、「並列」の構図に意味を見出していないようである。この氏の言は、長尾氏の「多く散在する二項対立が、それぞれにコノテーション(伴示的意味)の響き合いを生み、作品を豊かなものになっている」という指摘と相違するものである。

筆者も『好色一代女』が、主人公の「悲劇」もしくは「喜劇」の物語として読まれてきた中で、「二項対立」の世界という作品理解は、「画期的」であると思う。しかし、「対立

と融和の物語」(二項対立)が、「並列されているだけ」であるとする、この構造を配置した西鶴の意図は何であるのだろうか。二項対立の構造には、それが結局、何を映し出しているのかというところに、今なお検討の余地が残されていると思う。

また、広嶋進氏は『好色一代女』が悲劇、喜劇の一方を描いた作品ではないと指摘する。氏は、「第一部 少女期」(巻一の一から三)<sup>8)</sup>と、「第三部 奉公人期」(巻二の三から巻四の四)を「奔放||明」、「第二部 公娼期」(巻一の四から巻二の二)、「第四部 私娼期」(巻五の一から巻六の三)、「第五部 終章」(巻六の四)を「悲哀||暗」と読解し、「本作は、異質な職歴と異質な主人公の行動・心象が交互に出現するという構想を持つ作品」であると指摘する。さらに、次のようにも指摘する。

『一代女』は貞享期の女性諸職を主人公が遍歴していく作品なのであり、悲劇でもな

ければ、喜劇でもない。作者は主人公に職種と境遇にふさわしい「其時の心」と行動を取らせ、悲嘆させたり、大胆奔放な行動をさせたりしているにすぎないのである。

広嶋氏は、「異質な職歴と異質な主人公の行動・心象が交互に出現する」と指摘するが、その「二項対立」の概念にも通じるような構成に、特段の意味を見出していないようである。けれども、長尾氏が「コノテーション(伴示的意味)の響き合いを生み、作品を豊かなものになっている」と述べているように、交互に出現する主人公の非遊女期と遊女期にも、何らかの伴示的意味があるとは考えられないだろうか。

そこで本稿では、先学の研究成果を踏まえ、二項対立の構造の観点から『好色一代女』における西鶴の主張を検討する。その方法として、まず長尾氏が「性の過剰」と「性の欠如」のモチーフを抽出した巻一の一の場面の意味と、「二項対立」の主体を今一度検討す

ることから始める。そして、「二項対立」が主人公の回想において如何なる形で出現するのかを確認し、回想の終末における主人公の感情を手がかりに、それが映し出すものを明らかにしてみようと思う。

## 二 構想

巻一の一には主人公一代女に過去の好色体験を語るよう求める二人の若者が登場する。長尾氏はこの二人の若者から「性の過剰」と「性の欠如」のモチーフを抽出した。その二人が登場する場面は次のとおりである。

人の日のはじめ、都のにし、嗟峨に行事ありしに、春も今ぞと、花の口びるうごく梅

津川を渡りし時、うつくしげなる当世男の采体しどけなく、色青さめて恋に貌をせめられ、行末頼みすくなく、追付親に跡やるべき人の願ひ、我万の事に、何の不足もなかりき。此川の流れのごとく、契水絶ずもあらまほしきといへば、友とせし人驚き、

我は又、女のなき国もがな。其所に行て、閑居を極め、惜き身をながらへ、移り替れる世のさまざまを見る事もといふ。この二人生死各別のおもはく違ひ、人命短長の間、

見果ぬ夢に歩み、現うつつに言葉をかはすがごとく(傍点日比野)

長尾氏は、二人の若者が語る性の永続の願望が、「全く現実への働きかけのないもの」であることを理由に、問題提起の意味はないと分析し、その存在意義を「性の過剰」と「性の欠如」のモチーフの提出と捉えた。たしかに、前者の「契水絶ずもあらまほしき」という願望は、氏が指摘する「性の過剰」と言える。後者は「女のなき国もがな」、「惜き身

をながらへ」たいという願望は、「性の欠如」であると言える。

しかし、二人の若者が抱く願望は、相反するものであるにせよ、長尾氏も「若者の価値観は、経済的物質的・生活の満足よりも、性の満足を問題にする。性が優先している」と指摘するとおり、結局のところ差異はない。二人が抱く願望の性質は、「性の過剰」と「性の欠如」であるが、どちらも過剰な性への欲求であることに違いはない。

また、右にも取り上げているが、当該場面には二人の若者が抱く願望を「生死各別のおもはく違ひ」と否定する観察者が存在する。

長尾氏は二人の若者に、「モチーフの提出」という存在意義を見出すが、一方で彼らの願望を否定する観察者については、存在意義を見出していないようである。しかしながら、観察者も二人の若者と同じく、作品のモチーフを提出する人物であると考えられる。それ

は、二人の若者の人物像と、観察者の発言内容が、その直前の冒頭の言辭と重複している。

美女は命を断斧と古人もいへり。心の花散、ゆふべの焼木となれるは、何れか是をのがれじ。されども時節の外なる朝の嵐とは、色道におぼれ若死の人こそ愚なれ。其種はつきもせず。

二人の若者が性の永続の願望を語ると、観察者はそれを実現不可能であると否定するが、右のとおりその直前(冒頭)では、何人たりとも老いを避けることができないという事実と、にも関わらず性を追い求め命を落とす若者が絶えないと主張されている。したがって、二人の若者と観察者は、冒頭の主張を具体化した人物であると言える。

こうした冒頭の言辭と、二人の若者、並びに観察者の

重複する主張には、奇をてらったところもなく、注目すべきようなところは見当たらない。



しかし、その重複する主張は、冒頭とその直後という読者が作品の世界観に初めて触れる場所に集中して配置されている。つまり、長尾氏が二人の若者が語る願望を「実質的には何の問題提起にもならず」、「何の答をも要求しえない」ため、その存在意義を「モチーフの提出であると考えることが、最も妥当性を持つ」と指摘するように、重複する主張全体を「モチーフの提出」と見ることが妥当なではなからうか。作品のモチーフには、氏が指摘する「性の過剰」「性の欠如」という過剰な性への欲求に加えて、それを否定する性の破綻の不可避という要素があるのである。

なお、詳細については後述するが、筆者の言う性の破綻の不可避とは、性力の枯渇や死だけを意味するものではない。森氏が「序章にみられる女と男・老と若・強と弱・美と醜を対比する発想は、終章まで一貫している」と指摘するように、対立関係の解消といった

ところを想定したものである。その破綻の不可避を次に見てみる。

### 三 モチーフ

モチーフの一端である破綻の不可避といった要素については、前述のとおり森氏が、終章の主人公が大雲寺の五百羅漢にかつて関係を持った男たちの面影を見出す場面において、死の「平等」という形で指摘している。さらに、当該場面における主人公の発言からは、同じく作品のモチーフである過剰な性への欲求を読み取ることができ、続く主人公が命を絶とうとするも救われる場面では、回想の核心が表示されている。

まず、主人公が五百羅漢像から、かつて関係を持った男たちの面影を見出す場面を見て

みよう。

なを奥の岩組の上に、色のしろい仏貌、その美男、是もおもひ当りしは、四条の川原もの、さる芸子あがりの人なりしが、茶屋に勤めし折から、女房はじめに、我に掛り、さまざま所作をつくされ、間もなくたたまれ、挑灯の消るがごとく、廿四にて鳥辺野にをくりしが、おとがいほそり、目は落入、それにうたがふべくはなし。

又上髭ありて、赤みはしり、天窓はきんかなる人有。是は大黒になりてさいなまれし寺の長老さまに、あの髭なくば、取違ゆべし。なんぼの調謔にも身をなれしが、此御坊に昼夜おびやかされて、らうさいかたぎに成けるが、人間にはかぎりあり、其つよ蔵さまも、煙とはなり給ひし。(傍点日比野)

右の場面では、主人公と男性たちの過去の関係が、性力という観点から語られている。森

氏は、右の場面に「弱蔵と強蔵が対のかたちで登場」することに注目し、その相反する性の持ち主であった二人の男の末路について、「死においては弱者も強者も平等」と指摘する。なお、長尾氏は、つよ蔵、よわ蔵について「まさしく「性の過剰」と「性の欠如」が直接体现されたものである」と指摘している。

そして、先にも取り上げたが、森氏は、主人公が五百羅漢像から死んだ男たちの面影を見出す場面と、その後、自らも命を断とうとするが、寸前のところで救われるという展開に、「ここに加害・被害のふたつの性による対立と、その反復による性差の消失、そしてその先にある融和のモメントを読み取るべきであろう」と指摘する。筆者は氏の「ふたつの性による対立」の「解消」という点には同意するが、主人公が命を救われる場面では、彼女が命を絶とうと決意するまでに自己の精神を追い詰めた原因が語られていることに

も、注目すべきである。その場面をまず見てみる。

むかしのよしみある人、引留て、かくまた、笹葺をしつらひ、死は時節にまかせ、今迄の虚偽、本心にかへつて、仏の道に入とすすめ、殊勝におもひ込、外なく念仏三昧に明暮の板戸を、稀なる人音づれにひかされて、酒は気を乱すのひとつなり。みじかき世とは覚へて、長物語のよしなや。

「むかしのよしみある人」は、主人公に仏道に入信することを進め、彼女の精神を死の淵から救い出す。その彼が主人公の過去において問題視するのは、「虚偽」である。この発言は、主人公の過去が欲心と偽りに満ちたものであり、結果としてそれが他者の性を破壊に追いやるとともに、自己の精神を死を決意するまでに追い詰めたことを意味する。つまり、「虚偽」の本質は、作品のモチーフの一つと述べた性への過剰な欲求であつて、助

言はこうした行為との決別を促すものなのである。そして、回想の終末という場面において、「虚偽」と決別せよという助言を主人公は「殊勝におもひ込」み聞き入れている。これは主人公が語る回想の核心が、「虚偽」にあることを意味しよう。

そこで次節では、主人公の回想に出現する「虚偽」、「性の過剰」「性の欠如」と、性の破綻の不可避を見てみる。なお、本稿では長尾氏の指摘する「性の過剰」と「性の欠如」の概念と、森氏が指摘する男女の対立が、重複する概念であるものと認識して分析を進める。

## 三 モチーフの出現1

「性の過剰」と「性の欠如」の二項対立を軸に作品の分析を進めた長尾氏は、主人公が登場する章を対象に、それが「好色風俗の紹介と職種の設定」と、「エピソードの定式（欠如―過剰―露呈―追放。またはその省略型）」によって構成されていると指摘する。筆者は、各章のエピソードに一定の型が存在するという氏の指摘に賛成である。しかし、氏の指摘する主人公を主体者と見た「エピソードの定式」に疑問がないわけではない。氏は、主人公の性欲が欠如から過剰への変化を指摘するが、森氏が「主体（誰を主体と相手するか、注日比野）によってこの二つの概念が逆転する」と指摘するように、その概念規定には混乱がみられる。「性の過剰」と「性の欠如」の概念は前節で確認したとおり、対立（相

対)する男女に表示されていると見るべきである。また、「露呈」についても、氏は「しぶ恋」(巻一の一)や「不倫の恋」(巻三の一)、「欠点を暴く」といった個々の行為を挙げておられるが、「追放」にも繋がるその概念の核については言及していない。つまるところ「エピソードの定式」には、検討の余地が残されている。

一方、二項対立の主体に男と女を想定して分析を進めた森氏は、先に取りあげたとおり、「女優位・男優位の性差による固定した階層的秩序は存在しない」ことを確認した。さらに別稿で、長尾氏の指摘する露呈の概念に加え、主人公による「暴露」のモチーフの存在も指摘している。けれど森氏も、男女の対立要因や、暴露の核については言及していない。

もつとも、各章のエピソードにおける男女の対立要因とは、前節で確認した「虚偽」で



あり、長尾氏が「しのぶ恋」や「不倫の恋」といった行為を挙げる「露呈」とは、「虚偽」の「露呈」である。同様に、森氏が指摘する「暴露」も、「虚偽」の「暴露」である。それは西鶴が、『西鶴置土産』の自序で語る遊里における「虚偽」という行為の性質からしても明らかである。

世界の偽かたまつて、一つの美遊なれり。是をおもふに、真言をかたり揚屋に一日は暮がたし。女郎はなひ事をいへるを商売、男は金銀を費ながら気のつきぬるかざりごと

遊里は「偽かたまつて」造り上げられた世界であるという。主人公一代女も、巻一の四から巻二の二において遊女に身を落とすことから、「虚偽」とは他者に対して自己の性の有様を偽る行為を言ったものであり、これが作品世界における男女の対立要因である。加

えて、さきにも述べたとおり、本書の場合、「虚偽」には、性の過剰な追求の意が付随する。「しのぶ恋」や「不倫の恋」といった行為を想定する「露呈」についても、当該行為が周囲の人々に対して自己の性の有様を偽る行為であるように、その主体は、やはり「虚偽」である。かつ、その行為が社会において許されるものでないように、性への過剰な欲求である。

現に、「不倫の恋」という主人公と内儀の対立のエピソードを内包する巻三の一では、「虚偽」と同義の「偽り」の言辞が出現し、長尾氏の指摘する「露呈」「追放」の概念との関連が明確に読み取れる。

去山伏を頼みて、てうぶくすれども、其甲斐なく、我と身を燃せしが、なを此事つの

りて、齒黒付たる口に、から竹のやうじ遣て折れども、更にしるしもなかりき、かへつて其身に当り、いつとなく口ばしりて、そもそもよりの偽り(虚偽)、残らず恥をふるひて申せば、亭主浮名たちて、年月のいたづら、一度にあらはれける(露呈)。人たる人、嗜むべきは是ぞかし。それより狂ひ出て、けふは五條の橋におもてをさらし

(追放) (傍点・丸括弧日比野)

右の場面を念頭に置くと、各章のエピソードにおける人物間における「対立」の要因と、

「追放」へと繋がる「露呈」・「暴露」の概念の主体は、ともに「虚偽」である。したがって、作品からエピソードの定式を抽出するならば、「虚偽」——「露呈」・「暴露」——「追放」であり、「虚偽」が二項対立の主体である。しかも、長尾氏は「追放」の概念につい

て、「二つは、空間的な追放。ある場所から追い払うというものである。いま一つは、社会的空間における追放である。即ちある地位や職業から斥けるというものである(傍点日比野)」と述べている。氏の言う「追放」とは、破綻と換言可能であろうから、エピソードの定式とは、性への過剰な欲求と、その否定を意味する性の破綻の不可避のモチーフを可視化したものである。

そこで、右に述べたエピソードの定式を巻一の一、巻二の二をもとに観察しつつ、併せて「性の過剰」と「性の欠如」、破綻の不可避のモチーフの出現を見てみる。

○巻一の一

主人公は数多の「美男」に求められながらも、「其身はしたなくて、いやらしき」と

いう「青侍」と密かに恋に落ちる。(虚偽)

しかし、その恋は、「浮名の立事をやめがたく、ある朝ぼらけにあらはれ渡」り(露呈)、

主人公は「宇治橋の邊に追出され」、「青侍」は命を奪われる。(主人公追放、青侍死

・性の破綻)

※恋を求める主人公と「青侍」の容姿に注目すると、主人公は「我自然と面子なよやかにうまれ付し」や、「人まかせの髪結すがたも氣にいらず、つとなしのなげしまだ、

隠しむすびの浮世鬻といふ事も、我改ての物好み」といった描写がある。一方、青侍は「其身はしたなくて、いやらしき」と語られている。恋の当事者が、容姿が美しく、

さらにこだわりを持つ主人公と、容姿に美しさや、こだわりが感じられない青侍とい

う相反する二人であるように、この設定は、性(容姿)の過剰と欠如のモチーフの出現と見るべきだろう。そして彼ら(性「容姿」の過剰と欠如)が、性を過剰に求めた結果、性(恋)の破綻(主人公追放・青侍死)という結末を迎えるように、エピソードの定式とは、やはり、破綻の不可避のモチーフを可視化したものである。

○巻二の二・前半

困女郎へと位を下げた主人公は、「町の髪結」らしき無粋な客の相手をする。男は主人公に景気の良いところを見せようと、「前巾着より、一步ひとつ、まめいた三拾目程、幾度か数読て見せける」。(遊客虚偽)

男の仕草に怒った主人公は、「俄に腹いたむ」と言い、ふて寝する。すると男は、夜明けまで主人公を看病する。その行為を気の毒に思った主人公は、男に思いを遂げさ

せようとするが、男を呼ぶ大尽の「我は先へ帰れ。髪結人も待かねん」との声が聞こえ、自分の見立て通りの客であることが分かり、心変わりする。(主人公虚偽)(遊客身分の低さ露呈)

主人公は今後、野暮な男との浮名の立つのが嫌になり、そのまま起き別れる。(遊客帰宅・性の破綻)

○卷二の二・後半

主人公は自身が望む「帥なる男目」にたまたま逢うも、「女郎、帯とき給へ」とせかされる。主人公は「さてもせはしや。おふくろさまの腹に十月、よくも御入ましました」と言葉を返す。(主人公虚偽)

すると男は、「此嫌ひ成女郎は、わるい物じや」と言う。主人公はこれに文句を言え

ば、男が「むつかしい事は御座らぬ。さらりといんでもらいまして、女郎かへて見ましょ」と言うことが見え透き(主人公身分の低さ露呈)、

身揚げが恐ろしく、「わけもない事あそばして、お敵さまへのもれての御申分は、こちはぞんじませぬ」と言い引き下がる。(主人公・性の破綻)

※前半のエピソードでは、主人公は無粋な遊客の虚偽を見抜き、遊客は主人公の虚偽を見抜けずに遊興を終える。主人公と無粋な遊客の相反する人物像は、性(手管)の過剰と欠如のモチーフの出現とみるべきである。しかし、前半のエピソードにおける破綻の当事者は、主人公に拒絶された無粋な遊客(性の欠如)のみである。一方、後半のエピソードにおける虚偽と破綻の当事者は、粋な遊客(手管の過剰)に、困女郎の立場の弱さを見透かされた主人公(手管の欠如)である。前半と後半のエピソードには、手管



という共通のモチーフが存在するが、それぞれのエピソードにおける破綻の当事者は、対立関係にある一方の人物のみであって、巻一の一における主人公と青侍のように、破綻の不可避は表示されていない。

もつとも、巻二の二の前半と後半のエピソードでは、森氏が「同一章内」や「隣接する二章」、離れた「二話」(二章)のエピソードにおいて、「男女の力関係(加害、被害の関係・注日比野)がしばしば逆転」し、かつ、「男女の役割や行動パターンが交換可能」であると指摘するとおり、その逆転・交換関係が確認できる(前半、無粋な遊客劣位―主人公優位・後半、粋な遊客優位―主人公劣位)。

なお、森氏は、こうした男女の力関係を転倒させた二つのエピソードの出現について、「これらの話を同じ話型の反復と考えれば、登場人物の性差や年齢差はその話型

に変化を与える要素にすぎず、ただ性の関係におけるありとあらゆる人物の組み合わせが追求されているだけである」と指摘する。けれども、数多く出現する男女の力関係を転倒させた二つのエピソードが何を表示するのか、といったところについては言及していない。ただし氏は、先にも取り上げたとおりに、終章の大雲寺の場面をして、

「死において強者も弱者も平等」と読み解く。さらに、巻二の一の遊女と遊客の零落のエピソードからも、破綻の平等を指摘し、「男女の加害——被害の関係は『一代女』のひとつの重要な側面だが、栄華と落魄（原文ママ・日比野）の運命は「みな／＼（女も男も）」も変るところはないのである」と述べている。

巻二の二が内包する二つの虚偽と破綻のエピソードの結末も、死という極端なもの

でないにせよ、性の破綻である。したがって、虚偽を軸に男と女、性の過剰と欠如の優位・劣位を転倒させた、二つの虚偽と破綻のエピソードは、モチーフの一つである性の破綻の不可避を表示するものである。

○卷六の一・前半

客が内儀に、「めづらしいものはないか」と尋ねる。すると内儀は、「さる御牢人衆の娘」が手配できると作り話をする。(虚偽)

姿形を浪人の娘に作り替えた女は客の前に出ると、「小桜おどしといふ具足を、京へ染なをしにやらしやつた」と語り、無知をさらす。(知識の欠如・露呈)

「振袖は着ども、年は二十四、五ならぬ。是程の事はしるべき物をと、ふびんなり。」

(性の破綻)

## ○巻六の一・後半

「正味八分の女、身持いやしく(中略)、是はかしらからしらせて、奈良芋も気がつき  
ます。客はなし、喰ねばひだるし(中略)といふ。聞くもいやなり。」(知識の過剰・  
暴露)

「此女も、客を勤めて、かなしうない事をないて(虚偽)、  
路取置で、男は下帯もかかぬうちに立出、「御縁が御ざらば、又もと、帰りさまに、  
花代といふも、せはしや。」(破綻)

※本章における主人公の立ち位置は、風俗の語り手である。後半のエピソードについて  
は、虚偽、露呈、破綻の概念の出現順序こそ異なるが、暗物女(私娼)の「聞くもいや  
なり」という破綻した仕事ぶりが語られているように、定式に則った構成であると言

える。本章では破綻の当事者である二人の「暗物女」の知識の欠如と過剰が対蹠をなしている。

以上、右に取り上げた二章で確認したとおり、長尾氏の指摘する「追放」（破綻）に繋がる「露呈」の主体と、森氏が指摘する人物間の「対立」の要因には、「虚偽」が該当する。当該二章からエピソードの定式を抽出するならば、始章において性への過剰な欲求と、それを否定する破綻の不可避のモチーフが提出されているとおり、やはり、「虚偽」―「露呈」（暴露）―「破綻」（追放）といったところである。そして、エピソードの定式は全章において確認でき、巻一の一と同じく性を求める二人（性の過剰と欠如）の破綻のエピソード、もしくは巻二の二のような登場人物の力関係（性の過剰と欠如）を逆転させたエピソードを併置することによって、モチーフの一端である性の破綻の不可避が表示されている。

#### 四 モチーフの出現2

さきにも取り上げたが、森氏は男女の力関係の逆転(役割や行動パターンの交換)が「同一章内」だけでなく、共通性のある「二話」(二章)のエピソードにも確認できると指摘する。つまるところ、その「二話」(二章)における人物の力関係の逆転も、「同一章内」と同じく破綻の不可避を表示するものである。参考までに氏が指摘する巻四の三と巻四の四の要点と、人物の力関係の逆転を見てみよう。

##### ○巻四の三

奉公先から宿へと下る主人公の道案内をする「年がまへなる中間」は、主人公への恋

心を隠し、「主命なれば、御供つかまつりませねば」と語り、一見、誠実に振る舞う。

(虚偽)

主人公は中間が「我がこやどの新橋へはつれゆか」ぬことから、恋心を見抜く。(露

呈)(主人公・事実見抜く)

主人公は哀れみから中間と情事に及ぼうとするも、当人は「昔の剣今の薙刀、宝の山へ入ながら、むなしく帰る」と語り、性的不能をさらす。(中間・性の欠如)

○卷四の四

主人公は奉公先に向かう途中、その家の御隠居が多額の財産を持っていることを聞き、よそに男をつくり妊娠したら、「其親仁さまの子にかづけて、御隠居の跡を我が物にする」ことを企む。(虚偽)

主人公は家に到着すると、男性と想像していた御隠居が女性であったため、「かみさまへの奉公ならば、こまいもの」と後悔する。(露呈)(主人公・事実誤認)

御隠居は主人公に「同じ枕に寝よ」と言う。主人公は「是も主命なれば、いやとはいはず」言いつけ通りにする。すると御隠居は、「男になりて、夜もすがらの御調謔」、

主人公は迷惑を被る。(御隠居・性の過剰)

巻四の三では、老人劣位(男・弱蔵・破綻の当事者)―主人公優位と設定されているが、一方、巻四の四では老人優位(女・強蔵)―主人公劣位(破綻の当事者)と設定されている。二章を比較すると、虚偽―露呈―破綻の定式を構成する老人と主人公の性力の強弱(過剰と欠如)が対称化されていると言える。当該エピソードの関係は、モチーフである性(過剰と欠如)の破綻の不可避をよく表していると言ってよい。



なお、森氏は「隣接する二章」や、離れた「二話」（二章）のエピソードにおいて、人物の力関係の逆転（役割や行動パターンの交換）を指摘するが、その出現位置におけるパターンの存在や、全容については言及していない。作品を見渡したところ、登場人物の力関係の逆転は、始章から終章に至る隣接する章に出現するようである<sup>10</sup>。加えて、巻一と巻二、巻二と巻三といった隣接する巻の、それも同数の章（巻一の一と巻二の一といった具合）や、巻一と巻六、巻二と巻五の同数の章にも出現するようである（もともと、上記に該当しない位置にも出現を確認できる）。

そうした二章の対蹠点をいくつか見てみよう。

(1) 隣接する二章

○ 巻一の一と巻一の二

- ・「去御方の青侍其身はしたなくて、いやらしき事なるに」（巻一の二）
- ・「其殿のうつくしき、今の太内にも誰かおよびがたい。」（巻一の二）

※主人公の年齢不相応な性欲が原因で、暮らしが破綻する点が共通している。その一方で、主人公の相手役の男性の容姿が「いやらしき」（巻一の二）、「うつくし」（巻一の二）と設定されているように対蹠をなしている。

○巻一の二と巻一の三

- ・殿いの夜着よりしたに入て、其人をそそなかつて、ひたもの恋のやめがたく、程なくして、さてもさても油断のならぬは都みやこ（巻一の二）

・主人公は「殿様」と「うれしく御枕をかはせ」す。しかし、「殿様」が次第にやせ細っていくと、「都みやこの女のすきなるゆへぞと、思ひの外にうたがはれ」る。（巻一の三）

※「都」出身の主人公が、「殿」との肉体関係を理由に現状の生活環境から追放される点が共通している。その追放理由の事実(巻一の二)と無実(巻一の三)が対処をなしている。

(2)隣接する巻の同数の章

○巻一の一と巻二の一

・初対面の客の容姿が「よねぐるひの風儀」に見えないことを疑問に思った幫間が「おまへさまの傾城ぐるひなされますか」と問いかけると、「田舎大臣」は「此人が買れますと、革袋ひとつなげ出す。その後、「田舎大臣」は通り掛かった主人公に興味を持つも、主人公が太夫から天神に降格したことを聞くと、「内証に悪き事のありやと、是非にかなはぬ取沙汰」をする。(巻二の一)

※巻一の一における主人公は、あまたの「美男」に求められながらも、「其身はいたな  
くで、いやらしいき」という「青侍」を恋の相手に選ぶように、男性に対して優位な立  
場である。一方、巻二の二における主人公は、「よねぐるひの風儀にはあらず」とい  
う「田舎大臣」に、「是非にかなはぬ取沙汰」をされるように、男性に対して劣位な  
立場である。当該二章では、男性（容姿の欠如）に対する主人公の優位（巻一の一）と  
劣位（巻二の一）が対蹠をなしている。

○巻二の一と巻三の一

- ・「引舟・遣手氣を付、それさまへ御状ひとつと、機嫌のよき折ふしを見あわせ」（巻  
二の一）
- ・家の「あるじ」が、「おぶく、まだかと、お文さまを持ちながら」尋ねると、主人公

は「此お文はぬれの一通りで御入候か」と言葉を返し誘惑する。(巻三の一)

※破綻の当事者である主人公による手紙を男性の気を引く道具としての不利用(巻二の

一)と利用(巻三の一)が対蹠をなしている。

(3)巻一と巻六、巻二と巻五の同数の章

○巻一の一と巻六の一

・「自其時は十三なれば、人も見ゆるして、よもや、そんな事はと、おもはるこそおかしけれ。」(巻一の一)

・「振袖は着ども、年は二十四、五ならぬ。是程の事はしるべき物をと、ふびんなり。」(巻六の一)

※破綻の当事者である主人公(巻一の一)と「暗物女」(巻六の一)の年齢不相応な知識(主

人公・過剰、暗物女・欠如)が対蹠をなしている。

○卷二の一と卷五の一

・主人公は頼みをかけた三人の客のうち、ひとりには「檳榔子の買置いで、家をうしな」い、またひとりには「狂言芝居の銀元にて、大分のそん」をし、もうひとりには「銀山にかかる所あしく」音信不通となる。その後、主人公は、「粟粒程なる物いつとなくなやまして、其跡見ぐるしく」なり、「人なを見捨ければ」鏡を見なくなる。(卷二の

一)

・「美形をとろひ」た主人公は、「広い京にもかくれなき分知大臣」に見初められ「おもはくの外なる仕合」を享受する。大尽は主人公を「なを見捨給はずして、此勤めやめさせて」下屋敷に囲う。主人公はその出来事を「よき目利のないかとおもはれし」

と回想するとともに、「新茶入・新筆の絵をかづきながら、其家にてよき物になりぬ」と語る。(巻五の一)

※男性の目利きの誤りによる主人公の幸福・不幸が対蹠をなしている。

右のとおり、作品の随所に「性の過剰」と「性の欠如」の二項対立の構図(人物の力関係の逆転)が仕組まれている。破綻の不可避のモチーフとは、作品の基本概念であると言つてよい。

## 五 主人公の職種

さて、本節では前出の広嶋氏が指摘する「異質な職歴と異質な主人公の行動・心象が交

互に出現するという構想」の意義を検討する。

広嶋氏は「第一部」（非遊女期・奔放・明）と、「第二部」（遊女期・悲哀・暗）が各三章、第三部（非遊女期・奔放・明）が十章、第四部（遊女期・悲哀・暗）が七章、第五部（終章）が一章によって構成されていることに注目し、「主人公の「奔放」「悲哀」や気分の「明」「暗」が（中略）、非遊女期と遊女期とがおおよそ同数章ずつ一対になって登場し展開している」と指摘する。あらかじめ結論から述べてしまえば、氏の指摘する「奔放||明」である遊女期と、「悲哀||暗」である非遊女期が、「一対」になって登場するという構成は、作品のモチーフである性の破綻の不可避を表示するものである。たとえば、氏はその存在に言及していないが、「一対」である第一部（非遊女期）と第二部（遊女期）のエピソードに



は、色恋における人気のモチーフが存在し、前者では主人公が他者から求められる（人気の過剰）、後者では主人公が他者を求める（人気の欠如）といった形で出現する。当該モチーフが読み取れる箇所を次に列挙する。

○第一部少女期・人気の過剰

- ・「我をいのかぶ人、色作りて美男ならざるはなかりしに」（巻一の二）
- ・「我を見そめ給ひて、人伝をたのみ、めしよせられ」（巻一の二）
- ・「我を傳へ聞て、小幡の里人より、住隠れし宇治にきて、我を迎えて帰り」（巻一の二）

○第二部公娼期・人気の欠如

- ・「すかぬ男には、身を売ながら身をまかせず、つらくあたり、むごくおもはせ勤めけ

るうちに、いつとなく人我を見はなし」(巻一の四)

・「淋しくなりては、人手代・鉦たたき・短足・兎口にかぎらず、あふをうれしく」(巻

一の四)

・「きのふ迄嫌ひし男にあひ」(巻二の一)

・「我、女郎なれば逆、義理には身を捨る事、其座はさらじと、明暮思ひ極めしに、是程身のかなしきにも、相手なしには死れぬ物ぞ。」(巻二の二)

右のとおり、第一部と第二部のエピソードには、人気(人気・不人気)というモチーフが存在する。当該モチーフが第三部に確認できないことからすると、第一部と第二部は広嶋氏が指摘するとおり、「一对」であると言える。エピソードの性質についても、第一部の主人公が他者から人気であるように「明」、第二部の主人公が不人気であるように「暗」

であると言える。ただし、人気のモチーフを内包する第一部と第二部の各章における主人公は、エピソードの性質の「明」「暗」に関わらず、エピソードの定式の通り、破綻という結末を迎える。結末からすると、第一部と第二部に差異はない。したがって、人気のモチーフによって対称化された第一・二部のエピソードは、各章内部や二章における登場人物(性の過剰・欠如)の優位・劣位が対称化されたエピソードの出現の意義と同様、作品のモチーフである性(過剰と欠如)の破綻の平等を表示するものである。

一方、第三部・奉公人期「明」と、第四部・私娼期「暗」については、第一・二部と異なり、各部に独自の共通のモチーフと対称軸が存在し、内部でさらにエピソードの性質が明(過剰)・暗(欠如)に対称化され、性(過剰と欠如)の破綻の平等が表示されている。

第三部には色恋における情のモチーフが存在し、前半(巻二の三〜巻四の一)では欠如、

後半(巻四の二〜巻四の四)では過剰という形で出現する。続く第四部と第五部(終章)には色恋における洞察力のモチーフが存在し、第四部の前半(巻五の一〜四)では欠如、その後半(巻六の一〜三)と第五部では過剰という形で出現する。以下に、第三部と第四部・第五部における当該モチーフが読み取れる箇所を列挙する。

○巻二の三〜巻四の一・情の欠如

・「うらみの日をつもるは、そなたは我をしられぬ事ながら」(巻二の三)

・「よき事させながら、あまり成言葉がため、にくし、さむしく、此広き都の町に、男

日照はせまじ。」(巻二の四)

・「奥さまの用など尻に聞せ、後には、さらするたくみ、心ながらをそろしや。」(巻三

の一)

・「こよひも亦、長蠟燭の立切まで、悖氣講あれかしと、進め給へば、忽に御貞持よろしく」(卷三の二)

・「間もなく三人ながらたたきあげさせて、跡はしらぬ小哥ぶし、つらやつめたや、そのはづの事」(卷三の三)

・「影身に添て、万をくろめ見せざりしに、其程すぎて、筋なきりんきあそばし、我髪  
のわざとならず長くうるはしきをそねみ給ひ」(卷三の四)

・「自、幾所か替添して見およびしに、恋の外、さまざま心のはづかしき世間氣、いづ  
れの人も替る事なし。」(※夫婦の情愛の欠如)(卷四の一)

○卷四の二く卷四の四・情の過剰

・「彼着物をとりて着するを、はや女手に入て、神ぞ情しりさまと、もたれかかれば」

(巻四の二)

・「無理なる怨を申も、はや悪からず」(巻四の三)

・「其貞は悪さげなれども、やさしき心入、世間に鬼はなしと、嬉しく、耳をすまして聞に」(巻四の四)

※主人公が他者から恨まれる場合(巻二の三)や、情けを掛けられる場合(巻四の一)があれば、他者を恨む場合(巻二の四)や情けを掛ける場合(巻四の三)があるように、主人公と他者の感情の方向は一定でない。

○巻五の一〜四・洞察力の欠如

・「殊京都は、女自由なるに、我又あまらぬ事は、よき目利のないかとおもはれし。」(巻五の一)

・「鼻紙入より女郎の文出して、太夫が文章、どこやら格別と見せかくる。(中略)はいつぼねの吉野に書せたる文、見せらるるにしてから、犬に伽羅聞すごとく、ひとつも埒はあかず。」(巻五の二)

・「年は寄まじきものと、いとしきおもひながら、そこそこにあしらひ(中略)、恋慕の道おもひ切て、九月五日までの事をおもひしに、此親仁、つよ蔵にいで、夜もすがらすこしもまどろむ事もなく」(巻五の三)

・「けもない事を、お中にお子さまがやどり給ふなどいひてよろこび、てつきりと、男子には覚へあり。(中略)ひそかに重手代の、あたまにばかり知恵の有男を頼み、跡腹やまずに、仕切銀のうち二貫目出して、つくばはれける。」(巻五の四)

○巻六の一〜四・洞察力の過剰

・「京の石垣くづれなりと、さる御牢人衆の娘御なりと、新町で天神して居た女郎の果なりと、おまへさまも見しらしやつて御ざんす事もと、跡形もなき作り物。それとは思ひながら。」(巻六の一)

・「自、爰には勤めて、すぎにし上手を出して、帥ごかし颯、人の氣を取けれど、脇貞の小皺見出れ、若きを花と好る世なれば、後には問ふ人稀に、無首尾次第にかなし。」

(巻六の二)

・「今時は、人もかしこくなりて(中略)、かりなる事にも吟味つよく、むかしと替り、是も悪女、年寄はつかまず、目明千人、めくらはなかりき。」(巻六の三)

・「是なる老女は、何をかなげきぬ。此羅漢の中に、其身より先立し一子、又は契夫に似たる形もありて、落涙かと、いとやさしく問れて、殊更に恥かはし。」(巻六の四)



※第三部同様、主人公と他者間における見抜く・見誤るの関係は一定でない。

右のとおり、主人公の非遊女期（第一部・明）と遊女期（第二部・暗）、非遊女期内部（第三部・明）、遊女期内部（第四部・暗）と第五部（終章）というすべての枠において、「性の過剰」と「性の欠如」の破綻のエピソードを対称化することによって、作品のモチーフである性の破綻の不可避が表示されている。すべての枠という点に注目すれば、作品世界では性の破綻が、職種、人生の明暗に関わらず、ことごとく不可避なものとして取り扱われていると言える。

先にも取り上げたが、広嶋氏は主人公の非遊女期「明」と遊女期「暗」の二様のエピソードについて、「作者は主人公に職種と境遇にふさわしい「其時の心」と行動を取らせ、悲嘆させたり、大胆奔放な行動をさせたりしているにすぎない」と述べている。しかし、

本節で確認したとおり、作者西鶴は主人公の「職種と境遇にふさわしい「其時の心」と行動」によって、二つの虚偽とその破綻のエピソードを対称化し、作品のモチーフである破綻の不可避を表示していたのである。

以上、『好色一代女』の世界では、一章の内部や、隣接する章・巻、主人公の年齢・職種に基づいた二つのエピソードにおいて、性の過剰と欠如のモチーフを可視化した二人の人物（強蔵―弱蔵、博識―無知、若―老、人気―不人気など）の「虚偽」と、その破綻によって、性の破綻の不可避が表示されている。森氏が「性差による固定した階層的秩序は存在しない」と指摘するとおり、作品を通読すれば、性への過剰な欲求を抱く人物に優位も劣位も存在しない。彼らが行き着く先は免れることのできない破綻である。

では、結局のところ作品の随所に出現する性の破綻の不可避のモチーフが何を映し出す

のか、それを次に検討しよう。

## 六 主題

『好色一代女』の終章は老いを嘆く次の文から始まる。

万木眠れる山となつて、桜の梢も雪の夕暮とはなりぬ。是は明ぼのの春待時節もあるぞかし。人計年をかさねて、何の楽しみなかりき。

右の文に注目した篠原進氏<sup>11)</sup>は、それを物語冒頭の正月七日の嵯峨野の風景と対照させ、主人公がその半生において得たものを次のとおり指摘する。

終章の「万木眠れる」寂寞たる冬景色(老いの風景)は、冒頭部に円環することで、華

やかな正月風景(生誕の風景)へと一変するのだ。すなわち、一代女は自分の一生を四季の移り変わりと同じように静かにながめているのであり、悔いてはいないのである。ただ、そこには全力疾走した後の空しさだけがある。

氏は続けて、主人公の半生を「反道徳的」であるとし、「何の制約もなしに、自由奔放に生きることの空しさ、これこそが『一代女』の主題だ」と述べる。

筆者も、物語の主題と、主人公がその半生において得たものが「空しさ」であるとする氏の指摘に賛成したい。それは、性への過剰な欲求と、性の破綻の不可避という作品のモチーフから主人公の半生を追った場合も、同様の結論にたどり着くからである。なお、森氏も、篠原氏の「空しさ」が主題であるという指摘を論考の中で取り上げているが<sup>12</sup>、

二項対立の主体を男女と想定し作品の分析を進めた自論の結論との関連については言及していない。

篠原氏が主人公の言動を「奔放」と評すように、主人公が自己の人生において優先するものは、安息や安定ではない。彼女が優先するものとは、性の追求であって、むしろそれを優先するあまり安息や安定を自ら放棄する。

ときに主人公は「ならぬ時には元の木阿弥」（巻五の一）と語るとおり、生活苦のためやむをえず性売る場合もある。けれども、扇屋の内儀となりながらも客に恋心を持ち、それが原因で追放される（巻五の三）。主人公は幾度も苦境からの脱出の機会がありながらも、そのたびにそれを自らふいにする。やはり、主人公は性を追い求めるあまり、自ら安息や

安定を放棄しているのであって、過去の失敗に学ぶといったことがない人物なのである。

こうした主人公の人間性は、虚偽と破綻のエピソードの定式の存在がよく表している。

ところが、性に「奔放」な主人公も、物語終盤、巻六の三・四において自己の性力に限界が近づくくと、過去を振り返るといような心境の変化をみせる。

巻六の三では、かつて性欲を満たすがために自己の美貌を活用してきた主人公も、六十歳となり自己の人生を悲観する。そして今までに様々な情事を体験してきたことを思い出していると、眼前にかつて墮胎した九十五、六もの子どもの亡霊が出現する。主人公は「無事にそだて見ば、和田の一門より多くてめでたかるべき物を」と過ぎ去った過去を懐かしみ、亡霊が消えるといよいよ死を決心する。しかし結局、命を捨てることが出来ず、「喰で死るかなしさよりは」という理由から惣嫁となるが、老いた主人公は、もはや一人

も客を取ることが出来ず、「これを浮世の色勤めのおさめ」とする。

続く巻六の四では、「せめては、後の世の願ひこそ真言なれ」と思うに至った主人公は、大雲寺へ参詣し、「殊勝」な心持ちとなり、かつて関係を持った男たちの死という現実を認識する。そして、「さても、勤めの女程、我身ながらをそろしきものはなし。一生の男、数、万人にあまり、身はひとつを今に、世に長生の耻なれや、あさましや」と懺悔する。

物語終盤の巻六の三・四において性力の限界を感じた主人公は、自身の子と伴侶という親しい人物の亡失の過去を振り返る。これが意味するところは、安息、安定を放棄してまで性を追い求め、それを手にするがための虚偽と、その破綻を繰り返してきた主人公には、自己の生命以外、結局、何も残らなかつたということである。

西鶴は、人心の有り様について『日本永代蔵』の冒頭で、「人は実あつて、偽りおほし、

其心は本虚にして、物に依じて跡なし」と述べている。この言葉のごとく、時には周囲に影響され、また時にはやむを得ない事情により性を追い求めてきた主人公が、自己の性力が限界に達したことによって気づき得たこととは、やはり、篠原氏が指摘するとおり「空しさ」以外にない（「虚偽」という言葉が作中に登場することを踏まえれば虚しさ、虚無と言ったほうがより適当だろう）。

そして、主人公が過去を語り終えると、物語は次の言葉を最後に幕を閉じる。

よしよし、是も懺悔に身の曇晴て、心の月の清く、春の夜の慰み人、我は一代女なれば、何をか隠して益なしと、胸の蓮華ひらけてしほむまでの身の事、たとへ流れを立たればとて、心は濁りぬべきや

右の発言には、かつての主人公にあった虚無感など到底感じられない。主人公は、過剰な



性の欲求という偽りに満ちた過去を包み隠さず告白したからこそ、その精神は曇りが晴れ、清らかなものとなったのである。「たとへ流れを立たればとて、心は濁りぬべきや」という感情溢れる言葉は、性を追い求めた先に、虚しさしか存在しないことを身をもって知る主人公であるからこそ、発せられたものなのである。

以上、主人公の回想の随所で見られる相対する様々な対立する人物（性の過剰と欠如）の「虚偽」（性への過剰な欲求）の行き着く先が、いずれも破綻であるように、作中に多く存在する二項対立の構造は、性を追い求めることの虚しさを映し出していたのである。

## おわりに

本稿では、長尾氏が指摘し、森氏が発展させた『好色一代女』における二項対立の構造に注目し、それが映し出すものは何かを検討してきた。

主人公はその半生において、ひたすら性を追い求め、他者を巻き込み、ときには性を追求する他者に巻き込まれ、破綻を繰り返す。このエピソードの定式と、二項対立の構造が映し出すものとは、特定階層の性の優位や劣位ではない。誰しも性の破綻を免れることができないという紛うことなき現実であって、性を追求することの虚しさなのである。そして、二項対立の構造は、作品の全編、それも一章の内部、隣接する章・巻、巻一と巻六とといった作品の前半と後半、職種に基づいた位置に設置されている。この綿密な構造は、性

を追求することの虚しさが、『好色一代女』の主題であることを示している。

従来、本書は主人公の「さまざまになりかはりし事」に注目し、様々な読み試みられてきた。しかし、そうした様々な読みを可能にさせる種々のエピソードの行き着く先が、いずれも性の破綻であるように、主人公の年齢、職種、喜怒哀楽といった表面上の差異とは裏腹に、本書は性への過剰な欲求と、それを否定する性の破綻の不可避という一つのモチーフによって構成されていたのである。

### 付録

本論中で取り上げていない二章間における対蹠点と、その場面の要点を取り上げる。対

蹠をなす部分には、傍点、もしくは傍線と記号を付した。なお、隣接する巻の同数の章における対蹠点と、巻一と巻六、巻二と巻五における同数の章における対蹠点については、すべてを取り上げると膨大になるため、前者については各巻の第一章と第四章、後者については第四章のみを取り上げる。また、比較の都合上、同一場面を複数回取り上げる場合があることを断っておく。

○隣接する章の対蹠点

(巻一の三と巻一の四)

・「我薄命の身ながら、殿様の御情あさからずして、うれしく御枕をかはせし甲斐もなく」

(巻一の三)

・「身にそなはりし徳もなくで、貴人もなるまじき事を思へば、天もいつぞはとがめ給は  
ん。然も又、すかぬ男には、身を売りながら身をまかせず、つらくあたり」（巻一の四）

※高位の身分（国上臈「巻一の三」）・太夫「巻一の四」となった主人公の不遜な態度（巻一の  
三）と、謙遜した態度（巻一の四）が語られる点が対照をなしている。

（巻一の四と巻二の一）

・「女郎起し、九月の節句といふても間のない事じやが、定めてお約束が御座らふと、女  
郎の好問ぐすりを申せど、そんな事などちよろしく見へすき、九月も正月も、去方さまの  
御やつかいに成ますと、取あへぬ返事」（巻一の四）

・「男に起され、心まかせの首尾して後、情らしく親里をたづねけるに、欲の心から残さ

ず語りてをのづとうちとけ、正月の仕舞も我とたのみ、大かたに請あふをうれしく」(巻二の一)

※主人公が遊客を頼らない(巻一の一)・頼る(巻二の一)という点が対蹠をなしている。

(巻二の一と巻二の二)

a 幫間が「よねぐるひの風儀」には見えない「田舎大臣」を心許なく思い、「おまへさまの傾城ぐるひなされますか」と尋ねると、大臣は「革袋ひとつなげ出」し「今くわかぬる一步を、一握づつ」つかませ信用させる。(巻二の一)

a 遊客は主人公に羽振りのいいところをみせようと「前巾着より、一步ひとつ、まめいた三拾日程、幾度か数読で見せ」る。(巻二の二)

b 「田舎大臣」は主人公に興味を持つも、「けふより天職にさがり給ふ」と聞き、「あれ程うつくしきはまたもなきに、天神になしけるは、内証に悪き事のありや」と詮索する（事実、太夫の時分の主人公は、「手の見えたる男には言葉もかけず、高ふとまつていた」。(巻二の一)

b 主人公は遊客の「こいすぎたる風俗」から、「正しく町の髪結らしくおもはれける」と推測する。その後、遊客を呼ぶ大臣の「我は先へ帰れ。髪結人も待ちかねん」という言葉から事実であることが明らかとなる。(巻二の二)

※当該二章におけるaとして取り上げた場面では、野暮な遊客が財力によって人心の掌握を試みることが共通しており、その成功(巻二の一)と、不成功(巻二の二)が対蹠をなし

ている。加えて、bとして取り上げた場面では、容姿が野暮な遊客と主人公の間における事実を見抜く・見抜かれるの関係が対蹠をなしている。

(巻二の二と巻二の三)

・「若い男」の遊客の態度に激怒した主人公は、「俄に腹いたむ」と偽りを言い寝込む。そうこうしていると遊客を呼ぶ大臣の声が聞こえ、情事に及ぶことなく起き別れる。(巻

二の二)

・主人公は、「我が身持も月のかさなり、いつも定めがたし」と偽りを言うと、長老はおどろいて「はやく里にゆきて、無事なりて又帰れ」と言い、まんまと騙される。(巻

二の三)



※男性が主人公に騙される点が共通している。その被害者が「若い男」（巻二の二こと「長老」（巻二の三）である点が対蹠をなしている。また、主人公が語る偽りが、腹に関する事柄であることが共通している。

（巻二の三と巻二の四）

・「うらみの日をつもるは、そなたは我をしられぬ事ながら、住寺と枕物語聞時は、此年此身になりても、此道をやめがたく、そなた（主人公）に喰付、おもひ晴すべき胸定めて」

（巻二の三）

・主人公は「文章（恋文）つくせしうちに」心が乱れて、依頼主の男が愛おしく思うようになる。ある時、主人公は思い切って男に「我に思ひ替えたまはんか」と言う。すると男は「仕掛し恋も、金銀の入る事には思ひよらず」と言葉を返す。この言葉に主人公は、

「にくし、さむしく」思い、恋心が冷める。しかし、男は灯火が消えると、主人公にひと取りつき、「そなた百迄」という。主人公は、「おかしや命しらず目、をのれを十九迄置べきか」と思い、男を腎虚させる。(巻二の四)

※主人公と他者の恨む・恨まれるの関係が対蹠をなしている。

(巻二の四と巻三の一)

・(巻二の四については、右の(巻二の三と巻二の四)を参照)

・家の「あるじ」が、「おぶく、まだかと、お文さまを持ちながら」尋ねると、主人公は

「此お文はぬれの一通りで御入候か」と言葉を返し誘惑する。その後、主人公は「ある

じ」を我が物にするため、「奥さま」と離縁させようと企む。そして「奥さま」を「てうぶく」するも「其甲斐なく、我と身を燃せしが、なを此事つのりて、齒黒付たる口に、から竹のやうじ遣て折れども」あえなく失敗に終わる。(巻三の一)

※手紙(恋文・御文)をきっかけに、主人公が男性を口説くことが共通している。巻二の四では口説いた男の態度に激怒した主人公は男を賢虚させ、巻三の一では口説いた「あるじ」と、その「奥さま」を離縁させようとするも失敗に終わるように、当該二章では主人公の悪事の成功・不成功が対蹠をなしている。

(巻三の一と巻三の二)

・(巻三の一については、右の(巻二の四と巻三の一)を参照)

・「愷気講」で「御前さま」に人形が取りついた怪異が周囲に知られ、主人公は「殿様」にありのままの事実を話す。すると「殿様」は、「女の所存程うたてかる物はなし。さだめて国女も、其思ひ入に命を取る事、程はあらし」と言う。その後、「殿様」は女性を嫌気して奥には近寄らなくなり、「御前様」は「生別れの後家分」になる。主人公も嫌気がさし、「出家にも成程のおもひ」になり奉公をやめて上方へ帰る。(巻三の二)

※女性の愷気が語られることが共通している。主人公が愷気の当事者(巻三の一)・目撃者(巻三の二)である点が対蹠をなしている。

(巻三の二と巻三の三)

・(巻三の二については、右の(巻三の一と巻三の二)を参照)

・主人公は「惜き黒髪を剃て」歌比丘尼となるが、「どこやらに、すぎにし時の様子も残れば」、三人の男に招かれ関係を持つ。男たちは主人公と幾度も逢ううちに出費が重なり、やがて破産する。その後、男たちは知らぬ顔をする主人公を「つらや、つめたや」と恨む。(巻三の三)

※巻三の二での主人公は、男女関係が要因で「出家にも成程」の思いとなる。一方、巻三の三での主人公は、歌比丘尼の姿が要因で男性と関係を持つ。当該二章では要因と結果(男女関係と出家)が対蹠をなしている。

(巻三の三と巻三の四)

・(巻三の三については、右の(巻三の二と巻三の三)を参照)

・「奥さま」は「殿」が時折、夜更けに帰宅することからただ事ではないと詮索するも、

「髪」が少ないことを知られては、恋が覚めてしまうと恐れ、くやしい思いをする。主人公は、「奥さま」が髪の少ないことを恥ずかしく思っているからこそ、「ひとしほ御いとしまささり」影ながら支える。しかし、「奥さま」は主人公の「髪のわざとならず長くうるはしきをそねみ」、切れと命じる。主人公は嫌気が差し、「殿」に「奥さま」の髪が薄いことが露呈するよう行動し、その後「奥さま」は里へ帰される。(巻三の四)

※巻三の三での「黒髪」を剃った主人公は、三人の男と関係を持つ。一方巻三の四での「奥さま」は、髪の薄さが原因で「殿」との関係が崩壊することを懸念する。当該二章では髪のない(薄い)女性の男性に対する魅力の有無が対蹠をなしている。加えて、剃髪した姿の主人公が他者から恨まれるという設定(巻三の三)と、美しい髪を持った主人公が他

者から恨まれるという設定(巻三の四)も対蹠をなしている。

(巻三の四と巻四の一)

・「おあとへおふとんきせまして、本の御枕にしかへさせまいらせければ、そこらに人ないかと尋させらるる時、けふにかぎつて誰もありませんと申せば、我手を取給ふより手に入て、こちの物になしける。」(巻三の四)

・「或時、中の嶋何屋とかやへ替添せしが、此子息ばかり、我に近寄たまはず、見掛より諸事をうちばにして、初枕の夜も、何のつくろひなしに、首尾調ひけるを、さもしくおもひしが、此家今にかはらず」(巻四の一)

※主人公が男性を誘惑することが共通している。男性が誘惑に引つかかる(巻三の四)・引

つかからない(巻四の一)という点が対蹠をなしている。

(巻四の一と巻四の二)

・(巻四の一については、右の(巻三の四と巻四の一)を参照)

・掛け売りの代金を回収に訪れた「京の旦那の為に白鼠」と言われるほどの生真面目な「年がまへなる男」に、主人公は「さし当りて銀子もなければ、御ふしやうながら是を」と言い、着ていた着物を脱ぎ渡す。すると男は「是がとつてかへらるる物か」と同情すると、主人公はすかさず「神ぞ情しりさま」と言い誘惑する。誘惑にはまった男は、「其後、欲徳外になりて取乱し、若げの至りとも申されず、江戸棚さんごんにしほうけて」しまう。(巻四の二)



※魅力ある主人公と相対した、「中の嶋何屋」の「子息」が誘惑に引つかかることなくその後家を維持したという設定(巻四の一)と、「年がまへなる男」が誘惑に引つかかり、商売をしくじったという設定(巻四の二)が対蹠をなしている。

(巻四の二と巻四の三)

・(巻四の二については、右の(巻四の一と巻四の二)を参照)

・主人公は道案内をする老いた「中間」の労をねぎらうが、当人は「主命」であるからと  
 言い好意を断る。しかし、目的地にたどり着かないことを不信に思った主人公は、「中  
 間」の恋心を見抜く。すると「中間」は無理な怨みを言が、主人公は「律儀千万なる年  
 寄のおもひ入もいたましく」、同情心から情事に及ぼうとする。しかし、老いた中間は

性的不能をさらす。(巻四の三)

※生真面目な男が主人公に同情心を向けるという設定と(巻四の二)、主人公が生真面目な男に同情心を向けるという設定(巻四の三)が対蹠をなしている。

(巻四の四と巻五の一)

・主人公は奉公先の御隠居が男であると想像していたところ、実際に会ってみると女性であり、「かみさまへの奉公ならば、こまいもの」と悔しがる。しかも御隠居は男になつたつもりで一晩中、主人公を相手に戯れる。主人公は「きのどくなるめに」あつたと語る。(巻四の四)

・「美形をとろひ」た主人公は、「太夫に不断肩骨うたせて、したい事して」すごしてい

るという「広い京にもかくれなき分知大臣」に見初められ、「どこぞにお気に入った所」があつたのか定かでないが、「おもはくの外なる仕合」を享受する。主人公はその出来事を「よき目利のないかとおもはれし」と回想する。(巻五の一)

※主人公が他者の事実を見誤り、不運な目にあうという設定(巻四の四)と、他者が主人公の事実を見誤り、主人公が幸運を手にするという設定(巻五の一)が対蹠をなしている。

(巻五の一と巻五の二)

・(巻五の一については、右の(巻四の四と巻五の一)を参照)

・男は遊女の手紙を取り出して、「太夫が文章、どこやら各別」と風呂屋女を前に自慢する。しかし実のところそれは「はしつぼねの吉野に書かせたる文」であり、主人公は「あ

ひもせぬ太夫・天神の紋櫛など持事、心ははつかしき事なれども、若い時には遣ひたる金銀はままならず、せんしやうはしたし、我も人もかならずする事ぞかし」と語る。(巻五の二)

※女性に関する目利きを誤る男性が登場することが共通している。目利きを誤る男性が、財力を有し、太夫を知る「分知大臣」(巻五の一)である点と、財力がなく太夫を知りもしない若い男(巻五の二)である点が対蹠をなしている。

(巻五の一と巻五の二)

・風呂屋女は夜半の鐘が聞こえると、客に「皆寝さんせぬか。こちらは毎夜のはたらき、身はかねでした物でもなし、夜食も望みなし」と言う。その後、床入りするも「恋は外に」、親里の話や役者の話をし就寝する。(巻五の二)

・主人公は、雇い主の御隠居が高齢であるため恋の相手にならないことに不満を持ちながらも、「風ひかぬやうにして、寝さしやれませひ。若も目がまはば、起し給へ。是に寝ます」と声をかけ、「恋慕の道おもひ切」る。しかし実のところ御隠居は「つよ蔵」であり、一晚中眠ることもなく、「今時の若いやつらがうまれつきおかしや」と言い、主人公が「色々詫て、かまはず」行為を続ける。直に主人公は起き上がれなくなり、「中宿へ人におはれて帰」る。(巻五の三)

※当該二章では、女性が体力の欠如を理由にすぐさま床入りし、そのまま就寝するという設定(巻五の二)と、老いた男性が若者の体力の欠如をあざ笑い、自身は眠ることもなく情事に耽るという設定(巻五の三)が対蹠をなしている。

(巻五の三と巻五の四)

・(巻五の三については、右の(巻五の二と巻五の三)を参照)

・主人公は「一代見すてじ」と誓紙を書かせ「をろかなる田舎人」をおどす。主人公は男が「いろいろ詫ても堪忍せず」、さらに妊娠したと偽りを言い、脅しをかける。すると

男は「知恵の有男を頼み」主人公に銀二貫目を渡し謝罪する。(巻五の四)

※主人公が男性の本性(性力)を見誤るといふ設定(巻五の三)と、男性が主人公の本性を見誤るといふ設定(巻五の四)が対蹠をなしている。また、問題の解決のため、巻五の三では主人公が「人におはれて帰」り、巻五の四では「をろかなる田舎人」が「知恵の有男を頼」むように、第三者が介入する点が共通している。

(巻五の四と巻六の一)

・(巻五の四については、右の(巻五の三と巻五の四)を参照)

・武家の娘のふりをする暗物女は、「小桜おどしといふ具足を、京へ染なをしにやらしやつた」と「聞に腹いたし」ことを言う。客も聞かぬ顔もできず、「そちの名字は」と尋ねると、女は「浄土宗」と答える。主人公は「振袖は着ども、年は二十四、五ならめ。是程の事はしるべき物をと、ふびんなり」と語る。(巻六の一)

※巻五の四では、偽りを語る主人公の被害者である「をろかなる田舎人」が、「知恵の有男」を頼み事の解決を図る。一方、巻六の一では暗物女が偽りを語るが、自身の知恵のなさゆえに、その偽りが崩れる。当該二章では、偽りを言う女性と、それに相対する男性の知恵の有無が対蹠をなしている。

(巻六の一と巻六の二)

・(巻六の一については、右の(巻五の四と巻六の一)を参照)

・主人公は伊勢講の男たちを引き込み、「是播磨の旦那、それは備後のおつれさま」と、

「其国里をひとりも見違へる事もなく、其所言葉をつかい、うれしがる濡掛け」をする。

(巻六の二)

※暗物女が男性を相手に、内容が出鱈目な言葉を発するという設定(巻六の一)と、主人公が男性を相手に、内容が正確な言葉を発するという設定(巻六の二)が対蹠をなしている。

(巻六の二と巻六の三)



・主人公は遊山宿に身を落し、「あさましや、往来の人に名をながす」と、「間の山節」

をうたうが、「いづれがうたふも同音にして、おかしかりき」と語る。主人公は客の気を引くも、「脇貞の小皺見出れ、若きを花と好る世なれば、後には問ふ人稀」となり、

「片里も今は恋にかしこく、年寄女は闇にかづかず」と語る。(巻六の二)

・惣女となった主人公は「君が寝巻の一ふし」をうたってみたが「声おかしげ」であったため、牛夫に作り声をさせながら客を求め歩き行く。しかし客を取れずに終える。主人公は、「今時は、人もかしこくなりて、是程の事ながら、大臣の太夫をかりて見るより念を入、往来の挑灯を待あはせ、又は、番屋の行灯の影につれ行、かりなる事にも吟味つよく、むかしと替り、是も悪女、年寄はつかまず」と語る。(巻六の三)

※主人公が往来の客に老いを見抜かれるという設定(巻六の二)と、客を求め道行く主人公

が老いを見抜かれるという設定(巻六の三)が、対蹠をなしている。また、主人公が自身の声を「おかし」と言うことが共通している。

(巻六の三と巻六の四)

・主人公は様々な情事を体験してきた過去を思い返していると、眼前に「蓮の葉笠を着るやうなる子共の面影、腰より下は血に染て、九十五、六程」も現れる。主人公は「扱はむかし、血荒をせし親なし子か」と気づき、「無事にそだて見ば、和田の一門より多くめでたかるべき物を」と過ぎ去った過去を懐かしむ。(巻六の三)

・主人公は大雲寺に参詣し、五百羅漢の堂を覗くと、「是程多き中なれば、必おもひ当る人の良ある物ぞ」と言われていることに納得し、気をつけて見てみると、「すぎにしこ

ろ、我、女ざかりに枕ならべし男に、まざまざと生移しなる「面影」を見つける。そして主人公は、「惣じて、五百の仏を、心静に見とめしに、皆々、逢馴し人の姿に、思ひ当らぬは独もなし」と語る。(巻六の四)

※主人公が子どもという失った未来の存在に思いを巡らす設定(巻六の三)と、主人公がかつて関係を持った男という失った過去の存在に思いを巡らす設定(巻六の四)が対蹠をなしている。

○隣接する巻の同数の章における対蹠点

(巻三の一と巻四の一)

・主人公が「表の嫌ひはなきものと、しどけなく帯とき掛て、もやもやの風情」を見せると、「亭主」は「たまり兼て」情事に及ぶ。その後、「亭主浮名たちて」しまう。(巻三

の二)

・「或時、中の嶋何屋とかやへ替添せしが、此子息ばかり、我に近寄たまはず、見掛より諸事をうちばにして、初枕の夜も、何のつくろひなしに、首尾調ひけるを、さもしくおもひしが、此家今にかはらず」(巻四の一)

※主人公の誘惑にあう男性が、人生経験豊富な「亭主」(巻三の一)と、人生経験の浅い「中の嶋何屋」の「子息」(巻四の一)であるという点が対蹠をなしている。加えて前者が欲に溺れる、後者が欲に溺れない、という点が対蹠をなしている。

(巻四の一と巻五の一)

・(巻四の一については、右の(巻三の一と巻四の一)を参照)

・「美形をとろひ」た主人公は、「広い京にもかくれなき分知大臣」に見初められ、「どこぞにお気に入った所」があったのか定かでないが、「おもはくの外なる仕合」を享受する。

主人公はその出来事を「よき目利のないかとおもはれし」と回想するとともに、「新茶入・新筆の絵をかづきながら、其家にてよき物になりぬ」と語る。(巻五の一)

※人生経験の浅い「中の嶋何屋」の「子息」だけが主人公に手を出さず、その後も家を傾けることなく維持したという設定(巻四の一)と、「分知大臣」が主人公の価値を見誤ったがために財を消費したという設定(巻五の一)が、対蹠をなしている。

(巻五の一と巻六の一)

・(巻五の一の場面については右を参照)

・客の男が宿の内儀に「めづらしいものはないか」と尋ねると、内儀は「京の石垣くづれなりと、さる御牢人衆の娘御なりと、新町で天神して居た女郎の果なりと、おまへさまも見しらしやつて御ざんす事も」と、「跡形もなき作り物」を言う。すると男は「それとは思ひながら」も、その女に興味を持って、「其牢人娘、年比は。首筋は白いか。女房すぐれたといふは無理じや。只きれいにさへあらば、よふでおじやれ」と言い、偽りの武家の娘を相手に財を消費する。(巻六の一)

※男が女性を相手に財を消費する点が共通している。「分知大臣」が老いた主人公の事実(価値)を見誤るといふ設定(巻五の一)と、遊客が蔵物女の事実(武家の娘でないこと)を見抜くという設定が対蹠をなしている。また、事実を見誤る・見抜く対象である女性が、老いた主人公と、若い暗物女である点が対蹠をなしている。

## (卷一の四と卷二の四)

- ・主人公が遊客に「我を我に立て、人に帯とけともいはずにかへる男目、にくや」と言う  
と、その様子を見ていた連れの客は「はじめのしこなし、どうで御座る」と男に声を  
掛ける。すると男はよろこび、「命掛で間夫」と言うが、「是程我等にくる事、何とも  
合点がゆかぬ。定めし、汝等が取持て、身体よきに咄して聞いたか」と問う。連れの客  
は「いやいや、欲計にして、女郎の左様にはせぬ物、是は見捨難し」と言う。(卷一の  
四)

- ・ある時、主人公は思い切つて男に「我に思ひ替えたまはんか」と言う。すると男は「仕  
掛し恋も、金銀の入る事には思ひよらず」と言葉を返す。この言葉に主人公は、「にく

し、さむしく」思い、恋心が冷める。しかし、男は灯火が消えると、主人公にひしと取りつき、「そなた百迄」という。主人公は、「おかしや命しらず目、をのれを九十九迄置べきか」と思い、男を腎虚させる。(巻二の四)

※主人公が男の財力の有無に関連して、恋に落ちる(巻一の四)、恋から冷める(巻二の四)という設定が対蹠をなしている。

(巻二の四と巻三の四)

・(巻二の四については、右の(巻一の四と巻二の四)を参照)

・(a)主人公は髪の毛の少ないことを恥じる「奥さま」を影ながら支える。しかし、「奥さま」は主人公の「髪の毛のわざとならず長くうるはしきをそねみ」、切れと命じる。そうした命



令を主人公は「情なく」思い、暇を貰おうとするも許されず、次第に「身はやつれてうらみ深く、よからぬ事のみたくみ」、「殿」に「奥さま」の髪が薄いことが露呈するよう行動する。その後「奥さま」は里へ帰される。(巻三の四)

※主人公が他者の言動を不快に思い、報復に出ることが共通している。その報復対象が、巻二の四では男性、巻三の四では女性(巻三の四)である点が対蹠をなしている。

(巻三の四と巻四の四)

(巻三の四の a については、(巻二の四と巻三の四)を参照)

a 主人公は奉公先の御隠居が財産をため込んでいると聞くと、「透間を見て、脇に男を拵へ、腹がむつかしう成なば、其親仁さまの子にかづけて、御隠居の跡を我物に書置させ

まして、すえずえ世わたり」と企む。しかし、男と想像していた御隠居は、実際に会ってみると女性であった。(巻四の四)

b 主人公は呼ばれていないにも関わらず、仮寝している「殿」のもとへあたたかも呼ばれたようなふりをして行く。主人公は「殿」に「をれはよばぬが」と言われると、「さては私の間違へました」などと言い、「其ままはかえらず、しどけなく見せかけ」る。すると「殿」は「そこらに人ないか」と尋ねるので、「けふにかぎつて誰もおりませぬ」と言い、情事に及び「殿」を「こちの物」にする。(巻三の四)

b その夜、主人公は「かみさまと同じ枕に寝よ」と命じられ不思議に思うも、主命のため断らずにいると、御隠居は男になったつもりで一晩中、主人公を相手に戯れる。主人公

は「きのどくなるめに」あつたと語る。(巻四の四)

※巻三の四と巻四の四におけるaとして取り上げ箇所では、主人公の陰謀の成功(巻三の四)と不成功(巻四の四)が対蹠をなしている。加えて、bとした取り上げた箇所では、主人公が奉公先の主に言動を不思議がられる(巻三の四)―主人公が奉公先の主の言動を不思議がる(巻四の四)という点が対蹠をなしている。

(巻四の四と巻五の四)

・(巻四の四については、右の(巻三の四と巻四の四)のaを参照)

・主人公は「一代見すてじ」と誓紙を書かせ「をろかなる田舎人」をおどす。主人公は男が「いろいろ詫ても堪忍せず」、さらに「お中にお子さまがやどり給ふ」と偽りを言い、

脅しをかける。すると男は「知恵の有男を頼み」主人公に銀二貫目を渡し謝罪する。(巻五の四)

※当該二章では、主人公による偽りの妊娠を口実とした他者からの財産の入手の成功(巻五の四)と、不成功(巻四の四)が対蹠をなしている。

(巻五の四と巻六の四)

a 「ひがし・北・南、その方角に奉公せし蓮葉女数百人、かぞをるにくどし。年よれば、其身は梧の引下駄の踏捨のごとく、行がたしれずなりて、朽果るならひぞかし。」(巻五の四)

a 「なんぼの調諺にも身をなれしが、此御坊に昼夜おびやかされて、らうさいかたぎに成けるが、人間にはかぎりあり、其つよ蔵さまも、煙とはなり給ひし。」（巻六の四）

b 「我又、京の扇屋を出て、ひとりの閨も恋しく、此津に來りて、此道に身をなし、人をよく焼とて、野墓のるりと名によばれて、はじめの程は、主を大事に、酒さへ洒さず通ひせしに、じだらく見ならひて後には」（巻五の四）

b 「死は時節にまかせ、今迄の虚偽、本心にかへつて、仏の道に入とすすめ、殊勝におもひ込、外なく念仏三昧に明暮」（巻六の四）

※巻五の四と巻六の四におけるaとして取り上げた箇所では、遊女の破綻の運命が語られる点（巻五の四）と、男性の破綻の運命が語られる点（巻六の四）が対蹠をなしている。加

えて、bとして取り上げた箇所では、主人公の不徳な態度(巻五の四)と、有徳な態度(巻六の四)が対蹠をなしている。

○巻一と巻六、巻二と巻五の同数の章における対蹠点

(巻一の四と巻六の四)

・「身にそなはりし徳もなくて、貴人もなるまじき事を思へば、天もいつぞはとがめ給はん。然も又、すかぬ男には、身を売ながら身をまかせず、つらくあたり、むごくおもはせ勤めけるうちに、いつとなく人我を見はなし、明暮隙になりて、をのづから太夫職をとりて、すぎにし事もゆかし。男嫌ひをするは、人もてはやしてはやる時こそ。淋しくなりては、人手代・鉦たたき・短足・すぐちにかぎらず、あふをうれしく、おもへば、

世に此道の勤め程かなしきはなし。」(巻一の四)

① 「気を留て見しに、あれは遊女の時、又もなく申かはし、手首に隠しぼくろせし、長者町の吉さまに似て、すぎにし事を思ひやれば、又岩の片陰に座して居給ふ人は、上京に腰元奉公せし時の、旦那殿にそのまま。是には、色々の情あつて、忘れがたし。」(巻六の四)

② 「惣じて、五百の仏を、心静に見とめしに、皆々、逢馴し人の姿に、思ひ当らぬは独もなし。すぎし年月、浮流れの事ども、ひとつひとつおもひめぐらし、さても勤めの女程、我身ながらをそろしきものはなし。一生の男、数、万人にあまり、身はひとつを今に、世に長生の恥なれや、浅ましや」(巻六の四)

③ 「是なる池に入水せんと、一筋にかけ出るを、むかしのよしみある人、引留て、かくま

た、笹葺をしつらひ、死は時節にまかせ、今迄の虚偽、本心にかへつて、仏の道に入とすすめ」(巻六の四)

※巻一の四では、主人公が自身の「すぎにし事」(巻一の四)を思い返す。一方、巻六の四ではパートナーであった男との「すぎにし事」(巻六の四)を思い返す。当該二章では主人公の思い返す出来事の自身・他者が対蹠をなしている。加えて、主人公が他者から見捨てられる(巻一の四)、他者に救われる(巻六の四)という点が対蹠をなしている。また、二章ともに、主人公が遊女という職業の「かなし」(巻一の四)、「をそろし」(巻六の四)という負の面を語ることが共通している。

(巻二の四と巻五の四)



・主人公は「女子の手習所」に取り立てられ、「我宿として暮する事のうれしく」、「人の息女をあづかる事大かたならずと」思い、「身のいたづらふつふつとやめて」神妙に暮らす。(巻二の四)

・主人公は「ひとりの閨も恋しく」蓮葉女となり、「はじめの程は、主を大事に」するも、次第に「じだらく」になる。(巻五の四)

※巻二の四では、奉公人である主人公の真面目な暮らしぶりが語られる。一方、巻五の四では、私娼である主人公の不真面目な暮らしぶりが語られる。当該二章では、主人公の奉公人(市井)―私娼、真面目―不真面目という設定が対蹠をなしている。

\*1 本文の引用は、麻生磯次・富士昭雄『決定版対訳西鶴全集』（明治書院）に拠った。旧字体は適宜、現行の通行字体に改めた。また、他の西鶴作品についても同書に拠った。

\*2 暉峻康隆『西鶴―評論と研究 上』（中央公論社、一九五三年）

\*3 谷脇理史「『好色一代女』試論（上）―そのしたたかな生と性―」（『文学』一九八五年七月）のち、同名論文（下）（『文学』一九八五年一〇月）とともに、同氏『浮世の認識者

井原西鶴 日本の作家25』所収、新典社、一九八七年）引用は後者による。

\*4 長尾三知生「『好色一代女』における語りの定式」（『西鶴の出發』所収、私家版、一九八八年）本論文における長尾氏の論文の引用は、すべて同書による。

\*5 森耕一「『好色一代女』の〈女〉——性差をめぐる物語——」（『園田国文』一三号、一九九二年三月）のち、同氏『西鶴論 性愛と金のダイナミズム』所収（おうふう、二〇〇四年）引用は後者による。本論文における森氏の論文の引用は、断りがない限り同書による。

\*6 注3同論文

\*7 広嶋進「『好色一代女』の悲哀と滑稽——暉峻康隆氏説の矛盾を巡って」（『清心語文』

四、二〇〇二年八月）のち、同氏『西鶴新解 色恋と武道の世界』所収（ぺりかん社、二

〇〇九年）引用は後者による。

\*8 主人公が就く職種に注目し、各章を区分したのは、浮橋康彦氏である（『好色一代

女』構造上の諸問題」『新潟大学教育学部紀要』一三号、一九七二年三月)。広嶋氏は浮橋氏の区分に則り、エピソードの性質を分析した。

\*9 「『好色一代女』巻三・四の意味―女奉公人一代女の役割―」(園田国文一五号、一九九四年三月)のち、注5同書所収。

\*10 浮橋氏は、主人公が巻三の二で「出家に成程のおもひ」と語る点、巻三の三で「今惜き黒髪を剃で」という点、巻三の四の主人公が「我いつとなく人の形振を見ならひ」髪結女になるという点に注目し、「俳諧的な連想の接続が感じられる」と指摘する(注9同論文)。森氏は、巻三の一・二・四において「これら三話に共通するのは、妻の側の何らかの欠如である。巻三の一の妻は、強蔵の夫に対して相対的に性的能力が欠如(中

略)。卷三の二の妻は夫が妾を寵愛したために性の欠如、この卷三の四の妻は、髪の欠如の弱点ゆえに夫の「夜ふけての御かへり」（浮気）を強く非難できない」と指摘する（注9同論文）。

\*11 篠原進 「『好色一代女』と小町伝説」（『弘学大語文』十一号、一九八五年三月）のち

『日本文学研究大成 西鶴』（国書刊行会、一九八九年）所収

\*12 注5同論文

### 第三章 『色里三所世帯』の構造

#### 一 心理描写

『色里三所世帯』（貞享五年六月刊）は<sup>1)</sup>、三巻四冊（各巻五章）で構成され、書名の「三所」という言葉から推察されるように、物語の舞台として巻上に京、巻中に大坂、巻下に江戸が設定されている。

その梗概は以下のとおりである。京の東山に二十四歳にして隠居した主人公外右衛門が持ち前の財力と性力にまかせて、数多の女性と関係を結び、その生活に飽きると、大勢の

幫間を引き連れて、大坂、江戸に転居し、各地で放蕩の限りを尽くす。やがて性力が限界に達すると、吉原の近く小塚原に庵をこしらえ、後世を願うが、蔑ろにしてきた女性たちの執心にさいなまれ悶死する。

本書は、主人公の死とその要因を描いた、いわゆる因果応報譚的な物語であるが、本書の研究史を見るかぎり、主人公と女性たちの人間関係が、結末の死にどのように結びつくのかについては、今のところ言及されていない。その理由は、かつて本書が西鶴存偽作とされていたため、諸家の関心がもっぱら作者を突き止めることに向いていたことにあるようである。なお、岸得蔵氏が本書と他の西鶴作品を比較して、使用された語彙の共通性から、これを彼の作品であることを指摘し<sup>2)</sup>、それ以後、本書を西鶴作品の一つとして見る向きが大勢を占めるようである<sup>3)</sup>。

もつとも本書が、西鶴作品の一つに数えられるようになった今日においても、作品の評価は高くない。本書が刊行された貞享五年というと、町人物の第一作である『日本永代蔵』や、武家物の第二作である『武家義理物語』などの意欲的な作品が刊行されている。『色里三所世帯』は、旺盛な執筆活動の中で世に送り出された作品の一つであると言えるが、本書は右の二作とは異なり、内容が「低調」とか「猥雑」であると評価されているように、評価や注目度については同列でない<sup>4)</sup>。筆者も、本書に「低調」、「猥雑」などところがあることを否定しない。けれども、本書の作者と目される西鶴が、処女作『好色一代男』（天和二年刊）を創作したときからすでに、人間心理を映し出すことに優れた人物であったことは、諸家が認めるところである。ならば『色里三所世帯』の「低調」、「猥雑」と評される作品世界においても、結末で主人公が過去の女性たちとの対立が原因で命を落とすよ



うに、西鶴はその対立する彼らの心理を映し出しているのではないだろうか。そして、その心理こそが本書の主題であり、それを映し出す方法にこそ、西鶴作品としての見るべき一つの価値があるのではないだろうか。

そこで本章では、結末における主人公が命を落とす場面を手がかりにして、主人公と女性の対立要因をまず検討する。そして、その対立要因を主題と想定して、それがいかなる方法によって作品世界に映し出されているのかを明らかにする。

## 二 「もてあそび」と「執心」

まず、主人公が命を落とす結末の場面を見てみよう。

俄に無常を觀じ、小塚原のくさむらにひとつのいほりをむすびて、おのおの是に取こもり、後の世をねがふてみれ共、夢に太夫が見え、まぼろしに後家がたち、現に京の妾女共が顕はれ、うしろよりは大坂でだましたる娘が取付、まへより置ざりにせし女がしがみ付、次第に氣力のおとろへるにしたがひて、毎日五人七人、女のかたちかさみて、外右衛門は殊に十一人の者共、よいかげんにうそいふたるうらみ、其執心爰にかよひ、後には寝もせぬ夢におどろかされ、ひとりひとりくらいつづめにやつれていとなく息たえだえに、女ばうはいやじやいやじやと、いひ死、ひとりも残らず同じ枕に果ぬ。

主人公は、蔑ろにしてきた女性たちの「執心」によって命を落としたことが語られている。

この「執心」に続く言葉に注目したい。そこには「其執心爰にかよひ」とある。これを素

直に読めば、主人公と関係を持った女性には、執心が生じていたということになる。

物語の冒頭で、主人公は「ただ人のもてあそびは女道と思ひ入、金銀有にまかせて、酒淫・美色に身をかため」る人物と語られている。その主人公と女性の関係は、冒頭の言葉通り、主人公の財力や性力を担保にした「もてあそび」（巻上の一）であり、身勝手な要望を一方的に女性に提出し、対応を迫るといふものである。たとえば、後家の髪を切った姿を面白がった主人公は、未婚の若い娘を集め、その親に金を払い、髪を切らせ後家姿に変えさせる、という具合である（巻下の一）。

本書と同じく、西鶴の浮世草子である『好色一代男』には、主人公世之介と関わる遊女の美談が、多数収録されていることは周知の通りである。一方、『色里三所世帯』に美談と呼べる話はない。主人公は「思ひ入の太夫、千五百両にて」身請けしても、「是

もあくまでのたのしみ」としか考えておらず(巻上の五)、その行為は「もてあそび」ではない。女性の執心という感情は、主人公の「もてあそび」(要望)に対応する際に生じる。

さらに、こうした要望と対応という主人公と他者の関係は、始章から終章に至るすべてにおいて確認できる。換言すれば各章には、要望と対応という話の枠組みが存在するわけである。ただし、要望を提出する人物と対応に当たる人物は、主人公←女性に限らず、主人公←男性であったり、女性←主人公であったりと様々である。提出される要望の性質は、主人公や他者(女性・男性)ともに大半が性に関するものであるが、幫間が「小判五両もらはば、宵より八つ門のあく迄かはらけを喰ていませう」(巻上の五)と、主人公に金銭の要望を提出する場面があるように、必ずしも性に限定されない。執心の発生源についても、女性に限らず、主人公であったりと様々である。もつとも主人公の場合、「ただ人のもて

あそびは女道と思ひ入」れる人物であると語られているように、女色に常に執心する人物であるといえる。しかし、筆者がここで言う執心とは、欲求不満の意であって主人公のあそびの思考とは意味が異なる。

また、執心が人物に及ぼす影響も様々である。たとえば結末で三都の女性たちの執心が原因で、主人公が命を落とすように、他者を肉体・精神的に消耗させる場合があれば、対照的に自己の肉体・精神を消耗へと追いやるという場合もある。

このように各章には、要望と対応という話の枠組みが存在するが、それを構成する要素、執心の発生源、影響といったところは一定でない。では、形が一定でない理由については後述するとして、各章における要望の提出と対応、登場人物の執心の様相をいくつか見してみよう。

## 〈巻上の一〉

・主人公は屋敷の女性を集め「女ずまひ」（女相撲）を催す。その勝者には「ほうび」を与え、夜の相手をすると言語する。（要望）

・女性たちは「旦那のおなりとあれば、如在なく」相撲を取るが、いずれも引き分けに終わる。（女性対応・執心・消耗）

## 〈巻中の三〉

・主人公は大勢の幫間と女性を引き連れ、豪勢な「遊山船」に乗り込む。

・主人公の様子を目撃した他船の男は「あんなめに只一度あひで、首なり共きられたし」と叶わぬ願いを口にしたたり、その無分別な振る舞いに「愷気」を起こし、「おのれが

銀にてしたい事をしれ」と言い捨て遊びを取りやめる。(目撃者(男性)要望・執心・消耗)

・一部始終を水底から見ていた「龍宮の乙姫」は、主人公と幫間の無分別な行為に「いかに銀でなる事なればとて、さりとは遠慮なし。女の身は是非もなし」と怒りを露わにする。そして、主人公たちから「りんのたま」を奪う。(龍宮の乙姫対応)(主人公消耗)

〈巻下の四〉

・主人公は吉原にこそ「色道の極意」があると思ひ詰め、自身の住まいから通うのが面倒になり、揚屋の座敷を一間借り切り、そこで生活する。(執心)

・主人公は、「太夫を請出し町に置は、常に人のする事なり」と語り、太夫を身請けするも遊女屋の親方に経費を払い、そのまま留め置く。そして勤めのとときと同じように、太夫を揚屋まで呼び寄せ遊興する。(要望)

・太夫との揚屋での生活は「にわかには節約するわけにもいかず」財力を消費する。そして主人公は財力が残りわずかになると、「兎角は丁目にはぢおほし。殊更好色におぼれたる我々、病死は本意にあらず、女郎と打死」と覚悟を決める。(主人公対応・消耗)

右のように各章には、要望と対応という話の枠組みが存在し、かつ当該場面に関与するいずれかの人物に「執心」が出現し、その負の感情によって自身もしくは他者が消耗する



ことが共通している。この点に注目すれば、『色里三所世帯』は「執心」という負の感情が主題の書、と言つてよさそうである。もつとも、登場人物が提出する要望の多くが、性に関するものであることから、物語の性質を端的に言い表すならば、作中では用いられてこそいないが、情念と言つたほうがより適当であるかもしれない。

### 三 各巻の内部構造

前述のとおり『色里三所世帯』の各章には、要望と対応という話の枠組みが存在するが、この五章によって構成された各巻(三巻)にも、能や浄瑠璃の五段構成を模したかのような展開を辿るといふ話の大枠が存在する<sup>5)</sup>。

能・浄瑠璃の各段の構成については、浄瑠璃の概説書『竹豊故事』に、「五段ニ綴るハ能の番組ニ同じ。初段ハ脇能、弐ハ修羅、三ハ葛事、四ハ脇所作、第五ハ祝言也。大躰是ニ表せる物也」と、二種の芸能で共通することが記されている<sup>60</sup>。本書の各巻五章の展開も、概ねこの言葉のごとくであつて、それを前述の要望と対応の話で実現している。

また、その構造が意味するところについては後述するが、能・浄瑠璃の各段を模したかのような各巻の第一章から第五章の同数の章（各巻の第一章どうし、第二章どうし、という具合）の内容を比較すると、執心の出現する場面（要望と対応）に共通性が確認できる。

さらに、各巻の同数の章を比較すると、巻上から巻中、巻下へと後半になるにつれて執心の発生源と、執心によって消耗する人物が他者から主人公へと変化していく様子が確認できる（具体的に言うと、巻上と巻下では主人公と他者の執心と消耗の関係が逆転している）。

こうした主人公の京・大坂・江戸での生活を描き分けた各巻における能・浄瑠璃を思わせる話の展開と、その共通性の要点を次に取り上げる。なお、先に取りあげた巻上の一、巻中の三、巻下の四については割愛する。

## ○第一章

### 〈巻中の一〉

・主人公は召し連れた幫間たちに、一ヶ月間の「高名」（色狂いの成果）を尋ねる。（要望）

・幫間の一人が、自身の性力の強さと、女性を足腰立たぬようにしてきたという成果を語り、褒美に「紫の下帯」を所望する。（幫間対応、さらに主人公に要望）（女性消

耗)

・成果を聞いた主人公は、「世間の淫乱をしらずや」と語り、善吉という名の幫間を引き合いに出し、彼が所帯を持つ度に、女性が情事に疲弊して出て行ってしまい、「その後はあひ手もなくて、出家の持し旅女郎といへる物を、ことかけ」にし、「その外は堪忍」していると語る。主人公は、この強力な性力を持つ男ですら六尺の禪のうち三尺のみ紫にすることを許していると語り、手柄を語った幫間には「一尺二寸程」紫にすることを許すと語る。(主人公対応)(幫間・主人公執心)(女性消耗)

〈巻下の一〉

・江戸へ到着した主人公は、すぐさま宿の亭主を呼び、女性を催促する。(主人公要望)

・亭主は主人公に「すこしの堪忍し給へ」と言うが、主人公と幫間たちは「男女のわけ

をしつて此かた、相手なしには一夜もあかしたる事なし」と言葉を返す。すると亭主は困った様子で、「爰元の男も、女にまいるぞ。かかるからは、おのおのにまくる事にあらず。世は堪忍でおさまった、証拠を見せん」と言い、女性に不自由する江戸の男たちの暮らしぶりを見せる。(亭主対応) (主人公執心)

・主人公は、やもめ暮らしの男たちが、女性不在を嘆き、性力を有り余していることを口々に語る姿を見て、「江戸は女のすくなき所」であることを理解し、「百三十里くだつたるしるしに無分別」が止まる。(江戸の男性執心) (江戸の男性・主人公消耗)

※第一章は、女性の性力が相撲の番付に喩えて語られ、主人公を求め争う(巻上)、幫間が色狂いの成果を語り、主人公が自身の性力の力強さを語る(巻中)、江戸の男たちが女性不足を嘆き、有り余る性力を語る(下巻)と言ったように、登場人物の有り余る性

力が語られることが共通している。また、浄瑠璃の初段には、事件の発端や世界観が表示されているように、第一章にも同様のことが言える。すなわち、巻上は女性が男性不足を理由に執心を抱く世界（主人公優勢・女性劣勢）、巻中が主人公と女性の執心が衝突する世界（男女の性力の均衡）、巻下が男性が女性不足を理由に執心を抱く世界（主人公劣勢・女性優勢）である。各巻の話は、第一章で表された世界観のもと展開していく。

## ○第二章

### 〈巻上の二〉

・主人公と共に暮らす非番の女性たちは、「桜戸の奥におし入れられ」る。すると男不

在の淋しさから一人の女性が、「爰もさながら女護の嶋、男のすがたは見ず共、せめてや其袖風もなつかし」と言う。(女性要望・執心)

・女性たちはみなで縁側に立ち並び、「父なし子産る種にもならんか」と言い、美しい裸体を風にさらす。しかし、「あたたら花を見る人なくて」行為を終える。(女性対応)

・淋しさを募らせた女性たちは、「桂男の影さへ、我見付そめし、人の物にはなさじ」と、「是をさへりんきしてあらそ」う。(女性消耗)

〈巻中の二〉

・主人公は、「いまだ色残れる大坂中の後家、毎日あつまれる小宿」があることを聞き、小宿に頼み後家を呼び寄せる。小宿の主人が「後家といふ姿のおもしろや。何国にても髪を切て中幅帯、数珠人の眼玉をぬき、いつはりの談義参り、殊にあひどりに悪事

負のびくにをつれ、前巾着の芥子銀は、男の餌にかひて、是程各別なる物はなし」と語ると、それを聞いた主人公は「心うき立、なを名の高きをまねき」よせる。(主人公要望)(後家執心)

・主人公を相手にした「随分はがねをならす後家達、只一会にこりて」、その後、小宿を尋ねることがなくなる。その帰りの姿を見ると、主人公の性力に圧倒され、「正氣にて帰るはひとりもなし」であった。(女性対応・消耗)

・「よいきみの外右衛門」は、「振袖の後家さがせ」と周囲に命じる。しかし「心中は各別」であるが、振袖を着た髪切り姿の後家など滅多におらず、機転を利かせた幫間は、美しい娘たちを集めると、その親に「大臣御物すぎを語り」財力で合意を取り付け、「惜や黒髪を切せて後家分」にする。(主人公執心・要望)(女性対応・消耗)



## 〈巻下の二〉

・主人公は「随ぶん広き座敷を一日かりきつて」、その表を通る女性たちを誘い込み情事に及ぶ。誘われた女性の一人が、「そもそもには釣れながら、後々若き女に目くれて、今朝から相手なしに堪忍なりがたき寂しさ。いやなれば余人かせぐに、今となつて七つきにさがれば、何をいふても一時の勝負、此のままに帰るは去りとは残念、わたくし心底はかくのごとし」と不満を言う。(女性執心・要望)

・主人公と幫間が不満を言う女性の相手をする、女性は満足して、気に入った男に「是は伽羅代」と言つて「金子五両」を渡し、「うれしそうに」帰つていった。(主人公  
 ・幫間対応)(女性消耗(金銭))

・主人公は枕を交わした女性から「金子その外、かたみもらはざるはひとりもなし」と

いうよき出来事から、「若ざかりのつよき百人ばかり、岡付にして爰にをくり」女性の相手をさせたら「何商よりましならん」と考える。しかし、「算用して見る程、是も命のちぢまる談合」という結論に至り、座敷を引き上げる。(主人公消耗)

※第二章は、「桜戸の奥におし入れ」る(巻上)、「後家」を「小宿」へ呼び寄せる(巻中)、通り掛かった女性たちを「座敷」に誘い込む(巻下)という、主人公が作り出した密室的空間において女性が消耗することが共通している。また、叙述の都合、右には巻上と巻下における相対的な場面は取り上げていないが、巻上には女性が男性不在を嘆く、巻下には女性が男性確保を喜ぶといった相対的な場面が存在する。それは次である。

・あまたのいたづらに身をなす女も有に、我にあひみる妻さへなくて、血気さかの比を、何の事もなく、かなしや、女のたのみしかけて、無理に堪忍せねはなら

ぬ。いづれもよくよく先生あしき業とは思ひながら、出雲の大社にして、夫婦さ

だめの談合の時、帳はづれのわれわれ、是は諸神に恨みあり。(巻上の二)

・何思ひ出してや此女ども、かたはしから泣出し、鼻いきうなりて、人の聞をも我をわすれて、此思ひ出申事、今生後生わすれませぬ。迎の事に御気せかれず、此方つづかせぬといふまで、芸をながふと所望せられ(巻下の二)

### ○第三章

#### 〈巻上の三〉

・主人公が屋敷の女性たちと湯浴みをする姿を二人の男性がのぞき見る。男性たちは、

「しばし見るにさへ立すくみて、目縁も張弓のごとく」となる。男性の一人は、「た

とへせめころさるる共、あの中へはまりて、浮よの思ひ出に、夜昼三日物として、死す共何か思ひ残すべき」と語り、主人公を「世に生仏といふはあの人さまの身なり」と讃える。(男性要望・執心)

・主人公の女性への無遠慮な行為を目撃した二人の男は「齒切をしてもせひなく、虚しく帰路に就く。(男性消耗)

・一連の出来事を男たちから聞いた人々は「心をうかせ」、死期が迫った老人も「後世咄聞様にはなし」という状態となる。(対応)

〈巻下の三〉

・吉原の初会の作法ゆえに太夫と床入りを果たせなかった主人公は、「さりとは是程におもしろからぬ事はなし。只の事にてあそびかねたる若盛、此ぶんにては埒あかず。

是から跡が女郎ぐるひ」と不満を言う。すぐさま揚屋の亭主を呼び出し、一座を三十日ずつ買い切る約束をする。(主人公執心・要望)

・亭主は「此宿はんじやうとよるこび、此大臣を福の神のごとく」崇め、聞かれもしないのに「此所の太夫たちの懐をうちあけ」る。(亭主対応)

・亭主が語った「気味のよき長物がたり」に、主人公は「上氣して身をふくらし、相手ほしそくなる貞つき」となる。しかし、位の低い遊女を相手にするのは嫌で、揚屋から帰る途中、「最前の太夫」を想像し自慰に耽り、「日本づつみを切かか」る程に性を発散する。(主人公消耗)

※第三章は、「枝川」「湯船」(巻上)、「船」「海」(巻中)、「舟」「にほんづつみ」(巻下)

といったように水に関連する場面が出現することが共通している。加えて主人公が「生

仏」(巻上)、「諸ぼさつ来迎の心ち、仏様の国へ御むかひ船かと」(巻中)、「福の神」(巻下)といったように、神仏に喩えられるほどの豪勢な色遊びに興じることも共通している。また、巻上では主人公の女性との暮らしぶりを聞いた人々は「心をうかせ」、一方巻下では、他者から太夫の逸話を聞いた主人公が「上気して身をふくら」すように、巻上と巻下では主人公と他者の興奮の関係が逆転している。

#### ○第四章

##### 〈巻上の四〉

・主人公は屋敷の女性たちに、「いづれにても男もふけて、それがしに形の似たるを我家を譲り、其母はすぐに奥様にする」と語る。(要望)

・それを聞いた女性たちは、すぐさま妊娠し出産する。(対応)

・主人公が生まれた子どもの顔を見てみると、誰一人として自身に似ておらず、「是ふしぎに思」い、その原因を詮索する。すると原因は、男ひでりの女性たちが芝居見物の際に目にした役者に惚れ込んだ、その「一念」によるものであった。その後、主人公は「地女房のしうちやくの深きをいやになりて、皆々かたづけ」る。(女性執心)(主人公消耗)

〈巻中の四〉

・主人公と暫間は、「けふ一日と申ながら、せぬと思へば堪忍ならず」と欲求不満を募らせる。するとそこへ、「見る程かはつた出立」の参詣へと向かうと思しき女性たちが通りかかる。彼女たちの素性を供と思しき男に尋ねると、「諸国男執行」に回る最

中であると言う。それを聞いた主人公は、「渡り舟よ」と言い、彼女たちを幕の中へ引き込み情事に及ぶ。(主人公執心・要望(女性・対応))

・しかし主人公は、女性たちの性力に圧倒され、「もはやならぬならぬ、ゆるし給へ」と音を上げる。けれども女性たちは「我々一生の思ひ出に、最前の御自慢程に、あく程あかせて見給へ」という。この言葉に主人公はおどろき倒れ込む。(主人公要望・消耗)(女性対応、さらに主人公に要望を提出・執心)

※第四章は主人公が屋敷の女性が自身に似ていない男子を出産したことを「是ふしにぎ思」う(巻上)、「見る程かはった出立」の女性と相對する(巻中)、「太夫様の台所より仕出し食、かはつたるもり手をたべける」(巻下)といった、女性に関係した奇妙な出来事が出現することが共通している。巻上での主人公は女性との間に生じた出来事



を「皆々かたづけ」收拾する。一方、下巻では、「俄に始末もならず」となるように、事態への対処が可能から不可能へと逆転している。

## ○第五章

〈巻上の五〉

・ 幫間たちの苦しい懷事情を聞いた主人公は、「歴々の太鼓、やぶれ口の御身体、それ何程ほしきぞ。何にても今迄見ざる芸をし給へ」と言う。(要望)

・ すると一人の幫間が、金子五十両で、溝石に寝て一日中、杵で打たれてみせるという。

それを聞いた主人公は千両貰ったとしても命が持たないと言うと、幫間は、「逆も借銭のくびかせ、いつの世にかはぬける事成がたし。大かたきげんとりても、今の世の

大臣小判にならず。物思ひして死んよりは、一筋にころされ、せめて妻子が為に成やうに」と語る。(幫間主人公の要望に対応、さらに主人公に要望を提出)(幫間執心)

・主人公は幫間の言葉に感心し、「それ程まで金銀にさしつまりし事の哀れ、我其難をたすけん」と語り、望み通りの小判を分け与える。しかし、「分をしる程慰みにならず。此の里もおかしからず」と思うようになる。(主人公対応・消耗(金銭・精神))

〈巻中の五〉

・主人公は「毎日一人づつ揚て、首尾せぬといふ事」なく過ごす。一人の遊女に遊びの真意を詮索されると「大願あつてかくする」と語る。(主人公・執心)

・主人公は大坂の色里のすべての遊女と逢い尽くすと、その後、「地女にかかり、一子細づつありて、金銀にてなる程の者を、毎日ひとりづつ、手わけしてさがさせ」る。

(主人公・要望・消耗(金銭))(他者・対応)

・毎日、一人の色事を思い立ってから三年が経過すると、「すこしづつ見覚して、昼をはづる女」もまじるようになり、遊びを取りやめる。(消耗)

(巻下の五)

・性力が限界に達した主人公は、幫間たちに「二たび生れかはらば、美成る女に生を請て、世間の男に上手をしかけ、腎虚させてあそぶべきねがひなり」と語る。(要望)

・「女のたはむれにあきはて」た主人公と幫間たちは、庵をこしらえてこれに籠もる。

(対応)

・しかし、主人公の眼前に、かつてもてあそんだ女性たちの亡霊が現れ、その「執心」にさいなまれる。主人公と幫間たちは「女ばうはいやじやいやじや」と言い、一人残

らず悶死する。(主人公消耗)(女性執心)

※第五章では、「是もあくまでのたのしみ」(巻上)、「すこしづつ見覚して」(巻中)、「女ばうはいやじや」(巻下)というように、主人公の女性に対する関心が低下することが共通している。さらに主人公が、幫間の「願ひ事」を聞く(巻上)、(大願)の成就のために行動する(巻中)、来世の「ねがひ」を語る(巻下)といったように、願望という共通点が存在する。巻上での主人公は他者の願望を聞く(叶える)立場であるが、一方、下巻では他者に対して願望を語る立場となるように、その立場が逆転している。

右のように主人公の京・大坂・江戸での放蕩を描き分けた三巻五章はいずれも能・浄瑠璃の五段構成を模したかのような構成と展開を辿る。その発想のもととなったであろう能

・浄瑠璃の段構成には、序破急(導入・転換・終結)の概念が存在するが、各巻の話の展開にも、そうした概念が読み取れる。すなわち、各巻の第一章から第五章を序破急に例えるならば、主人公ないし他者の有り余る性力と、異性への執心が語られる第一章の話が「序」(導入)である。他者が自己の執心、あるいは主人公の執心によって消耗する第二章の話が、「破一段」(展開)である。主人公の放蕩を目撃した他者が、執心を口にしながらも羨望を抱く、もしくは主人公が他者への執心を口にしながらも羨望を抱く第三章の話が、「破二段」(展開)である。主人公が他者の執心、ないしは自己の執心によって消耗する第四章の話が、「破三段」(展開)である。主人公が他者や自己の執心を嫌気して、当地での「もてあそび」を終了する第五章の話が、「急」(終結)である。

このように各巻五章の話の展開を図式化して見てみると、浄瑠璃ならばヤマ場(「破二

段」に相当する第三章を境にして、執心の発生源はともかく、それによって消耗する人物が、他者から主人公へとおおよそ転換している。(巻下のみすべての章において主人公が消耗しているが、この点については後述)。本書が、もてあそんだ女性の執心によって主人公が命を落とす因果応報譚的な物語であることを踏まえれば、こうした各巻の話の展開も、その道理を表現したものであると言えよう。

もつとも、各章は独立した内容であるように、執心による他者の消耗と、主人公の消耗の間に因果関係は確認できない。しかし、その第三章を境にした前後の章の話における執心の出現する場面(要望と対応という話の枠組みの構成要素)には共通性が存在し、その共通性を軸に主人公と他者の消耗関係が逆転している。しかも、それが確認できる二章の組み合わせには規則性があり、第一章と第五章、第二章と第四章にのみ確認でき、その他に

は確認できない。先に各章の話の展開については確認したが、今一度、巻上における第一章と第五章、第二章と第四章の執心の共通性と、それを軸にした主人公と他者の消耗関係の逆転の要点を見てみよう。なお、巻中・下については、叙述の煩雑化を避けるため、次に列記せず章末の付録に記す。

(巻上の一と巻上の五)

- ・「三番がちの方へ、長枕・釣よぎをほうびに給はり、其夜は旦那のおなりとあれば、如在なく足の指をそらし、手のふづく程はじめあひ、諸息のかよひ、腰のひねり、爰が大事所、をしやわれになつてぞしまひける。」(巻上の一)
- ・「外右衛門きくにおかしくて、歴々の太鼓、やぶれ口の御身体、それ何程ほしきぞ、何

にても今迄見ざる芸をし給へ。後共いはず、よきものは是にありとの御言葉に、うき立、一人が申せしは、小判五両もらはば、宵より八つ門のあく迄、かはらけを喰ていませうと申。(中略)それ程まで金銀にさしまりし事の哀れ。我其難をたすけんと、望みのとをり小判をとらせ、分をしる程慰みにならず。此里もおかしからず」(巻上の五)

※主人公が財の提供を約束したことがきっかけで、他者に内在する執心が噴出し、財を目当てに体を張ることが共通している。巻上の一では、相撲が引き分けに終わり、女性は褒美を貰えず仕舞いとなる(女性消耗)。一方、巻上の五では、芸を披露すると語った唄間たちは主人公より財を受けとり、島原の内情を知った主人公が精神を消耗する。



## (巻上の二と巻上の四)

・「こざかしき女のいひ出して、爰もさながら女護の嶋、男のすがたは見ず共、せめてや其袖風もなつかしと、西うけのくれえんに立ならび、むすびめときて帯の捨所われを忘れ、しどけなく、皆ぐれないの内衣のすそ、風にひるがへして、鼻息ばかりあらけなく、父なし子産る種にもならんかしと、扱もきみのよきありさま、あたら花を見る人なくて散らしぬと」(巻上の二)

・「二十人の美女十七はらみて(中略)、二月あまりに残らず平産して、其子を見るに、独りも只ばせの我に似たるもあらず。(中略)ひそかに是をせんさくするに、其身まことの契りもなく、たまたま狂言づくしを見にまかりし縁にひかれ、それぞれの思ひ人、男とぼしくて忘れもやらず、一念これにかよひ、旦那の情の折ふしも、心当にはそれよそれ

よと思ふより、恋のかたまつてかくこそ成けれ。」（巻上の四）

※屋敷の女性たちが男性不在を理由に執心を抱くことが共通している。巻上の二では、屋敷の女性たちが男の袖を吹いてきた風に裸体をさらすが、何も起こるはずもなく精神を消耗する。一方で巻上の五では屋敷の女性たちは、関係を持ったことがないにも関わらず役者への一念から、彼らにうり二つの男子を出産し、主人公を困惑させ、精神を消耗させる。

右の通り、巻上の第一章と第五章、第二章と第四章を比較すると、二つの話の間に因果関係は確認できないが、執心の発生場面に共通性があり、その共通性を軸に主人公と他者の消耗の関係が逆転している。こうした二章の関係は、巻中と巻下それぞれの第一章と第

五章、第二と第四章にも確認できる。つまり、三巻すべてにおいて確認できるのである。

この、三巻すべてという事実からすると、執心の出現場面の共通性と、主人公と他者の消耗関係の逆転は、各巻内部の当該箇所在意図して設置されたものであることは確かである。

また、それを確認できる位置が、前述の序破急で言うところの「序」と「急」に相当する第一章と第五章、「破一段」と「破三段」に相当する第二章と第四章の組み合わせに限定される理由は、やはり、各巻が能・浄瑠璃の五段構成を模したかのような展開を辿ることにあるのだろう。

今一度、格段の構成要素を簡単に確認すれば、浄瑠璃ならば初段が事件の発生、二段が事件の展開、三段が事件のヤマ場、四段が事件の新展開（解決への道筋の提示）、五段が事件の解決といったところである。五段構成とは例えるならば、三段を頂点とした山のよ

うな構成であつて、初段と二段が山頂（三段）へと向かう登り側の麓（初段）と中腹（二段）であつて、四段と五段が下り側の中腹（四段）と麓（五段）である。本書の各巻は、こうした浄瑠璃の五段構成を模したかのような構成であり、かつ第三章を軸に第一章と第五章、第二章と第四章の話における主人公と他者の執心と消耗の関係が逆転している。つまり、その関係の逆転とは、事件の発生と解決というような、緊張感の等しい話（山に例えるならば同一高度）の間に出現する仕組みなのである。

一方、ヤマ場と述べた各巻の第三章については、事実、主人公のもてあそびが頂点に達する。第三章では、遊興に耽る主人公の姿は、神仏に喩えられ、その様子を目撃した他者は、身勝手に振る舞う主人公に対して憤慨すると同時に羨望を抱く（巻下では、主人公が吉原の太夫を自由に出来ず立腹し、揚屋の亭主が語る太夫の姿に主人公が羨望を抱く）。

こうした神仏に喩えた表現や、他者から主人公に怒りという鋭利な感情が向けられる場面は、他章では確認できない特徴である。これらは、本章が話のヤマ場（転換点）であることを示していると言つてよい。

また、第三章が話の境（転換点）であることを暗示するかのように、「川」（巻上）、「船（舟）」（巻中・下）という水に関連する場面が本章にのみ確認できる。『俳諧類船集』には「川」の縁語に、「境」と記載されているように、<sup>77</sup> 言わば第三章とは、第一・二章と第四・五章の話をつかつ、分水嶺なのである。巻中・下の「船（舟）」についても、主人公が乗船し川を移動するように、その出現は巻上と同様の暗示的な意味があると見てよいだろう。

以上のように、第三章を話の境（転換点）と見た場合、おおよそではあるが、前半を執心

が原因で他者が消耗する話（主人公優勢・他者劣勢）、後半を執心によって主人公が消耗する話（主人公劣勢・他者優勢）と区分できる。そして、その前後の個々の話に因果関係はな  
いにせよ、執心の発生場面に共通性があり、且つ、それを軸に主人公と他者の消耗の関係  
が逆転している。こうした各章の話の関係（構造）は、結末で主人公がもてあそんだ女性（他  
者）たちの執心にさいなまれ命を落とすように、因果応報の道理を表示したものであると  
言える。

#### 四 物語の全体構造

各巻の内部は序破急のような三段構成（導入・転換・終結）であり、第三章を転換点とし

て主人公が優勢から劣勢に転じるわけであるが、この構成は巻上・中・下という各巻単位にも当てはまる。

前述したように、巻上は女性が男性不足を理由に執心を抱く世界(主人公優勢・女性劣勢)、巻中が男性と女性の執心が衝突する世界(男女の性力の均衡)、巻下が男性が女性不足を理由に執心を抱く世界(主人公劣勢・女性優勢)である。この三つの世界(三都)で活動する主人公は、「ただ人のもてあそびは女道と思ひ入」れる人物であると紹介されている(巻上の一)。すなわち、この主人公の人物像から各巻の世界観を分析すると、男女の執心が衝突する世界(巻中)を境にして、自身に好都合な世界(巻上・女性多数)から、不都合な世界(巻下・女性不足)に転じていると言える。

そして、これも前述したように、各巻の同数の章の展開を比較すると、執心の出現場面

(要望と対応)に共通性が存在し、その共通性を軸にして巻上と巻下における執心を露わにする人物と、その被害者(消耗)が、他者から主人公へとおよそ逆転している。つまり、三巻の同数の章は、各巻の話が中央の第三章を転換点とした三段構成(序破急)であったのと同様に、巻中の男女の性力が衝突する世界を転換点とした三段構成の形を成しているのである。

このように作品を図式的に見てみると、三巻では巻中を境に、各巻内部では第三章を境に、主人公が他者を消耗させる立場から、自身が消耗する立場へと転じる。つまり、作品の中央に位置する巻中の三が、物語の一大転換点ということになる。各章における他者と主人公の消耗関係を図表にすると次のようになる。



右の図表に記したように、執心の発生源とそれが原因で消耗する人物は、物語が後半にな

第一章	第二章	第三章	第四章	第五章	
女性執心・消耗	女性執心・消耗	男性執心・消耗	女性執心—主人公消耗	男性執心—主人公消耗	卷上
主人公執心—女性消耗	主人公執心—女性執心・消耗	他者執心・消耗—主人公消耗、	主人公執心・消耗—女性執心	主人公執心・消耗	卷中
主人公、男性執心・消耗	女性執心・消耗(金銭)—主人公消耗	主人公消耗	主人公消耗	主人公消耗	卷下

るにつれて、他者から主人公へと移り変わっていく。これは物語の結末で、性力が限界に達した主人公が、もてあそんだ女性の執心によって命を落とすように、主人公の性力と精神的余裕の喪失の過程を表現したものであるのだろう。そして、巻中の三では、主人公と他者両者に執心とそれを原因とした消耗が発生し、おおよそこを境に主人公が他者に対して優勢から劣勢へと転じるように、本章が物語全体の転換点であると言える。

もつとも巻中の三は、作品を図式的に見た場合だけでなく、叙述の特徴からも物語の転換点であることが読み取れる。本章には「竜宮の乙姫」が登場し、彼女は女性をもてあそぶ主人公の姿に激怒し、彼から「りんのたま」（性力の源の意）を取り上げて竜宮へと帰っていく。すでに指摘されているように、この場面は謡曲『海士』における海女が龍宮から宝珠を取り返すというエピソードを逆設定したものである<sup>8</sup>。竜宮の乙姫が主人公から「り

んのたま」を奪った以後、主人公の性力や財力を担保にした他者への優位は崩れ、彼は劣勢となる。したがって、巻中の三における『海士』の一場面を逆設定した場面とは、言わば世界の秩序が逆転する場面であって、物語の転換点なのである。

そもそも、「竜宮の乙姫」のような神仏のごとき存在は、主人公自身が神仏に喩えられることがあっても(巻上・中・下第三章)、他に登場しない。加えて主人公の肉体(性力)を消耗させる人物は、物語全体を通して「竜宮の乙姫」が最初である。当該章以前にも、主人公が消耗する姿は巻上の第四・五章にも確認できるが、それらはいくまで精神の消耗であって、彼の肉体(性力)に変化はない。さらに、本書三巻の中でも、巻中が「もてあそび」の頂点であると先述したように、当該章の前後には、主人公が数多の後家を相手に正気を失わせるほどに追い込む話(圧倒的優位・巻中の二)と、諸国を男修行に回る女性を相手

にした主人公が、死を意識するほどに追い込まれる話（圧倒的劣位・巻中の四）が配置されている。巻中の三と、その前後章における他章とは質を異にする話の設定からも、本章が物語全体の転換点であることが読み取れよう。

ところで、各巻の同数の章における執心の出現場面（要望と対応）には共通性が存在する。そして各巻の内部ではその共通性を軸にして、第一章と第五章、第二章と第四章が主人公と他者の執心による消耗の関係が対称化されている。つまりそれは、作品中央に位置する巻中の三を境にして、その前後の章が巻という区分を越えて、主人公と他者の執心と消耗の関係が対称化されていることを意味する（たとえば巻上の一であれば、巻上の五、巻下の一に加え、巻中の五、巻下の五とも対称化されているということである）。参考までに、巻上の一を基点とした対称関係の要点を見てみよう。なお、本章の第一・二節において、

『三所世帯』各巻各章の話の展開(要望と対応)の要点を取り上げたが、そこでは叙述の都合により、巻中の三を転換点とした各巻各章の対称関係までは網羅できていないことを断つておく。

・三番がちの方へ、長枕・釣よぎをほうびに給はり、其夜は旦那のおなりとあれば、如在なく足の指をぞらい、手のつづく程はじめあひ、諸息のかよひ、腰のひねり、爰が大事所、をしやわれになつてぞしまひける。(巻上の二)

・大願あつてかくすると、いろいろくどけ共、合点をせねば、かさねてあふ事も、算用むつかしければ、此女郎帰りし後にて宿の上する女の割玉子の吸物すへるを、それはこぼれ次第に取っておき、て、赤まへだれのもみくさになるもおかしく、是で夜の日の

勘定をあはせ、(巻中の五)

・俄に無常を觀じ、小塚原のくさむらにひとつのいほりをむすびて、おのおの是に取こもり、後の世をねがふれみれ共、夢に太夫が見え(中略)、うしろよりは大坂でだましたる娘が取付、まへより置ざりにせし女がしがみ付、次第に氣力のおとろへるにしたがひて(卷下の五)

このように主人公と他者の執心と消耗の対称関係は、卷(京・大坂・江戸)という区分を越えて張り巡らされているように、作品を網羅した仕組みであると言える。

こうした物語の仕組みは、『俳諧類船集』における「執心」の項目に「深い」という言葉が記載されていることや、作中に出現する「りんき」(卷上の二)については「丑の刻参」、  
 「執念」(卷中の三)については「蛇」という言葉が同書に記載されているように、主人公に向けられた他者の負の感情の深さ、絡みつくさまを表現したものであると言えよう。

## 五 三都の配置

『色里三所世帯』と題する本書には、巻上に京、巻中に大坂、巻下に江戸の順で三都が配置されているが、西鶴はなぜ、この順で三都を配置したのだろうか。またなぜ、巻上の京と巻下の江戸の話では、主人公と他者の優劣関係が対称化され、巻中の大坂は主人公のもてあそびの頂点(転換点)として話が設定されているのだろうか。このような構成・設定に至った発想の根拠を、西鶴の他の浮世草子における三都への認識を手がかりにして、少しばかり検討してみよう。

まず、京と江戸における話が、相対的に設定された根拠については、『好色一代女』の京と江戸を舞台にした「国主の艶妾」(巻一の三)に手がかりを求めることができる<sup>9)</sup>。

そこでは、二つの都市の女性の特徴が次のように語られている。

東そだちのすえずえの女はあまねくふつつかに、足ひらたく、くびすぢかならずふとく、肌へかたく、心に如在もなく、情けにうとく、欲をしらず、物に恐れず、心底まことはありながら、かつて色道の慰みにはなりがたし。女は都にまして何国を沙汰すべし。

西鶴は、色恋の相手として江戸の女性は好ましくなく、それに比べて京の女性は全国随一であると力説している。この認識からすると、「ただ人のもてあそびは女道と思入」<sup>10</sup>れる主人公が登場する『色里三所世帯』の始まりの地が京であることは、少なくとも江戸であるよりも自然であると言えよう。<sup>10</sup>

さらに、『好色一代女』には右に取り上げた他にも京の色恋の事情がうかがえる場面が



ある。「石垣恋崩」（巻五の一）では、「殊京都は、女自由なるに」、粹な大尽が女性の目利きを誤り、老いた主人公一代女が思わぬ幸福を手に入れるエピソードが語られている。「石垣恋崩」の一場面と『色里三所世帯』を比較すると、京に住居する主人公外右衛門も、「二十四人色作りの女にたはぶれ、我まなる遊樂」をするように（巻上の一）、行為の印象としては「女自由なる」の言葉に合致する。

一方、江戸における色恋の事情については、『好色一代女』には先に取り上げたほかに、それに触れた場面は見当たらないものの、『色里三所世帯』には当地の京とは相反する事情を触れた場面がある。たとえば、「江戸は女のすくなき所を今覚て」（巻下の一）とか、「所ならひにて、男世帯を人もとがめず」（巻下の三）といったように、江戸は男性労働者が多く在住する一方で、女性が少ない土地であるという。すなわち、京と江戸の色恋の事

情を男性の立場から比較すると、前者が女性に事欠かない、後者が事欠くという点で、相反する土地であると言えよう（先に取りあげたように「ただ人のもてあそびは女道と思入」れる主人公も、女性に事欠かない京では女性に執心せず、一方で女性に事欠く江戸では女性に執心する）。

大坂については、京や江戸と比較して、色恋の事情を表現した場面を西鶴の他作品の中から見つけることは出来なかった。しかし、色恋の事情ではないが、大坂の特徴は、『好色一代女』の「濡間屋硯」（巻五の四）に、「万売帳、なにはの浦は、日本第一の大湊にして、諸国の商人、爰に集りぬ」（巻五の四）と表現されている。『三所世帯』にも同様に、「此所日本ならびなき津なれば、大方の事に目をおどろかすべき事にはあらねど」（巻中の三）とある。西鶴作品からは、大坂が全国から商人と物資が集まる経済と物流の中心地

であると認識されていることが読み取れる。

加えて、本書作中では大坂の生活環境が次のように語られている。

此所（大坂四つ橋・筆者注）にかり座敷して、色男寄会世帯も珍らし。京より薪やすし、米自由にして、酒からく、延紙は吉野より手廻しよく、伽羅は堺より取よせ、南請にふんどしの干場もよし。爰ぞ住べき所と、恋の入江に碇をおろしぬ。（巻中の二）

この一文からは、大坂の生活環境が充実していることに加え、それが色遊びに興じる主人公に好都合であることが読み取れる。そもそも主人公は、京から大坂に移動する理由について、巻中の一の冒頭で「難波の冬籠り、新しき鮎汁ゆかし。京まで魚荷のはこぶもおもはしからず」と語るように、食物・物流の存在を挙げている。主人公が大坂を好色活動の場に選定したのは、当地に在住する女性の存在が理由の第一というわけではない。

こうした、経済・物流や生活環境という観点から『三所世帯』における江戸、京と大坂の土地柄を比較すると、江戸については「人は商売の利徳を望み爰（江戸・筆者注）にくだりけるに、此大臣は金すてにはるばるの御下向ありとは、よもやしるまじ」（巻下の三）と語られている。この一文からは江戸の経済の成熟度が大坂・京と比べて劣ることが読み取れる。京についてはさきに取り上げたように、巻中の大坂の場面で、「京まで魚荷のはこぶもおもはしからず」（巻中の一）とか、「京より薪やすし」（巻中の二）と語られているように、物流や生活環境は大坂に劣る。すなわち、『色里三所世帯』における大坂という土地は、経済・物流や生活環境という点で、三都の中で頂点に位置づけられていると言えるよう。

以上のように、『色里三所世帯』や、他の西鶴作品における京と江戸の相反する色恋の

事情に注目すれば、主人公と女性の関係が対称化された巻上と巻下の場面が、当該地であることは、自然な選択であるといえよう。巻中の場面が大坂であり、話の頂点(転換点)と設定されていることについては、色恋ではなく経済・物流、生活環境の観点であるが、当地が本書において全国の頂点と認識されていることからすると、これも自然な選択であると言えよう。ましてや主人公は『色里三所世帯』という書名のとおり、三都で世帯を構築するわけである。その書名からすれば、西鶴が三都(三巻)における話の相関関係を構築する際に、主人公が世帯を構える土地の色恋の環境や事情だけでなく、経済・物流、生活環境の特徴についても考慮したことは想像に容易い。さきに挙げた三都の経済・物流、生活環境を比較した言葉は、それを意味しよう。したがって、京・大坂・江戸の配置順序は、本書が三巻によって三段構成(導入・転換・終結)を取り、「ただ人のもてあそびは女道と思

い入」れる主人公の女性に対する優勢から劣勢に転じる姿が映し出されているように、こうした物語の展開によくなじむ配置であると言えよう。

## 六 主人公の人物像

さて、主人公の人物像に論点を戻そう。結末（巻下の五）において、性力が限界に達した主人公は、過去の全盛を「一生色道の達者、われにまされる人、世にあらじ」と振り返る。たしかに、本章以前の主人公は並外れた性力と財力を有する好色家であり、「諸分は京の嶋原に身をなし、口舌は大坂の新町に魂をくだき、はりつよき所を江戸のよしはらに見初」という経験からすれば（巻下の三）、その自己評価は過大ではないだろう。しかし、他者

を「もてあそび」、執心を生じさせ、ときにその執心によって消耗する人物が、「色道の達者」と呼べるような存在であったのだろうか。

他者の執心に対する主人公の反応に注目すると、性力が限界に達した後の彼は、かつてもてあそんだ女性の執心にさいなまれ命を落とすように、無力をさらす。一方、「色道の達者」であったときには、他者ないし自己の執心により消耗しながらも、色遊びを継続している。言い換えれば、全盛時には執心に対処できていた、ということになる。

ところが、主人公の執心への対処方法に注目すると、彼の自己評価とは乖離した一面が見えてくる。それは執心・性からの逃避と、その失態の弁解である。たとえば、巻上の四の末尾では、屋敷の女性たちが歌舞伎役者の顔にうり二つの男子を出産すると、主人公はその執心の深さを嫌気して「皆々かたづけ」といった具合である。

卷上の一から、右の卷上の四における屋敷内部での美女たちとの遊興については、浜田泰彦氏が「中国の天子の例に倣ったものである」ことを指摘し、卷上の四における主人公を驚かせた不測の事態には、次のように言及している。<sup>11)</sup>

こうして「天子」の理想を追って真似事を重ねていた外右衛門は、思わぬ形で美女たちにはしごを外され、「皆々かたづけて」、岡崎の後宮を解散する決意を固める。西鶴は、「爰が分別所」と呼びかけたものの、「天子」の資格を失った(放棄した)外右衛門には忠告も空しく、さらに大坂(巻中)、江戸(巻下)へと女色三昧の旅を継続することになった。

浜田氏は、卷上の四において主人公が「「天子」の資格を失った(放棄した)」と指摘してするが、この身辺整理は、執心・性からの逃避と言い換えることができよう。続く卷上



の五の冒頭において、主人公は先(前章)の執心・性からの逃避という苦い体験から「物にはよいかげんのなき物なり」という認識を示し、「遊興のうはもり、嶋原の女郎まして又なし」と思い立ち、太夫・天神を取りそろえた盛大な遊興をする。言うなれば主人公は、「ただ人のもてあそびは女道と思ひ入」という人格の回復を図るのである。しかし、その認識や行為は、執心・性から逃げ出したことへの弁解と受け取れなくもない。現に作中には、こうした主人公の性質を暗に言い表したかのような次の一文が存在する。

惣じてままならぬ世の事、帥になればかならず金なし。前かたなる太郎殿には、金の  
ある徳にて、うとき座敷もかしこく見えける。此大臣は諸色の得道して、しかも金捨  
るに極ての大きわざ(巻下の三)

主人公の遊興の質の高さが、他者と比較する形で語られている。しかし、さきにも述べた

ように「色道の達者」であるという主人公も、「太郎殿には、金のある徳にて」の例えのごとく、執心・性から逃避した直後に、その失態を隠匿するかのようになり前の性力・財力を用いた盛大な遊興をする。主人公が「色道の達者」を自称するだけでなく、「東山の大臣」（巻上の五）、「色道大和尚」（巻中の二）と呼称されることを踏まえると、失態を隠匿するかのような盛大な遊興は、自身の自尊心を維持しようとする側面があると言ってよいだろう。

もつとも、主人公の自尊心とか人間性は、性力と財力が限界に達し、「色道の達者」たる資格を喪失した後でも変わることがない。それは、主人公が「一生色道の達者、われにまされる人、世にあらじ」と振り返った直後から、命を落とすまでの場面から読み取れる。むしろ、財力・性力という、言わば装飾物を喪失した姿が描かれた当該場面にこそ、主人

公の心理がもつともよく表れていると言えるかもしれない。主人公が命を落とすまでの場面については、さきに取り上げているが、今一度、主人公の心理という観点から、話のあらましを見てみよう。

主人公は、かつては「色道の達者」と思い上がるほどであったが、性力が枯渇すると一転して「さりとはさりとは是ほどまできらひにもなる物かな」と女性を拒絶するようになり、自身もその思考の様変わりに驚くほどである。京から召し連れた幫間たちも、主人公と同じく無分別な放蕩があだとなり性力が枯渇し、過去の行為を後悔する。すると主人公は、弱り果てた幫間たちに、「世にはしたい事しかねて死ぬる人もあるに、皆々往生の覚悟をせよ。うごうごと長生しても、此事やみては生がひなし」と虚勢を張る。自身は「二たび生まれかはらば、美なるおんなに生を請て、世間の男に上手をしかけ、腎虚させてあ

そぶべきねがひなり。たまたま男に生れて、さりとは女のたはむれにあきはて」たと語る。そして「浮世の所帯やぶり、われわれなり」と身の上を悟ると、主人公一行は、吉原の近く小塚原の草むらに庵をこしらえ、そこに籠もり極楽往生を願う。しかし、その願いは叶わず、彼らはもてあそんだ女性たちの「執心」にさいなまれ、「女ばうはいやじや」とわめき、息絶える。

性力が限界に達した主人公は、幫間たちを前にして、「女のたはむれにあきはて」たと強弁している。この発言は、「一生色道の達者」と思い上がった過去のや、女性を「きらひ」になったという直前の思考とは相反するものであるように、性力が限界に達してしまつたことを弁解するかのようであり苦し紛れの感が漂う。庵に籠もるという選択も、女性を「きらひ」になったことを思えば、女性からの逃避と見えなくもない。そして女性の

亡霊が現れると、彼は「女ばうはいやじや」とわめくが、この発言は迫り来る死を前にして、遂に本音が漏れたと読み取れよう。

主人公の半生については、森田雅也氏が「外右衛門の人物形象は、京都・大坂・江戸と好色遍歴を重ねた往生ながら、『好色一代男』のように永遠の性の謳歌と言うような前向きなものではなく、大尽遊びのあげくに零落し、死んでいった悲しい遊蕩児の末路と読めてくる」と指摘する<sup>\*12</sup>。

一方、ダニエル・ストリューヴ氏は、「好色の失敗者という解釈も可能であろうが、むしろ好色を果てまで味わい経験した者とも言える」と述べ、「外右衛門こそが好色の達成者だと見られよう」と指摘する<sup>\*13</sup>。

両氏の見解は対照的であるが、主人公の半生には、この二つの面があるのではなからう

か。

たとえば主人公は京を後にする際、島原の太夫を世話女房にし、その生活を「あくまでたのし」んだと語られている。ストリューヴ氏が指摘するように、主人公は当地での「好色を果てまで味わい」尽くしている。しかし、主人公が太夫を請け出すに至った経緯は、幫間たちの執心を垣間見たことがきっかけで、島原の内情を知り、当地での遊びが面白くなかったことにある。したがって、森田氏が指摘するように、主人公の好色遍歴は、「前向き」なものとは言いがたいだろう。前出の浜田氏も、「「達成」とは程遠い経験をたどった」と指摘しておられるように、やはり主人公の好色遍歴には、執心・性からの逃避という消極的な選択を盛大な遊興によって隠匿しようとする節が存在する。

主人公の好色遍歴の表面部分に注目すれば、彼は「色道の達人」と言えるだろう。しか

し、それは虚勢によって保たれていたと言つてよいだろう。

## 七 小結

本章では、『色里三所世帯』における対立する主人公と女性たちの執心を主題と想定して、その感情がいかなる方法によって作品世界に映し出されているのかを検討してきた。

作品を構成する各章には、要望と対応という話の枠組みが存在し、当該場面に登場するいずれかの人物に欲求不満という形で執心が現れていた。こうした登場人物の執心を映し出した五章によって構成される各巻（三巻）は、能や浄瑠璃に類似した五段構成であり、展開にも共通性があった。その展開は、中央の第三章を境として、おおよそその前半では

他者が執心によって消耗し（主人公優位、他者劣位）、後半では主人公が執心によって消耗するというものであった（主人公劣位、他者優位）。しかも、前半と後半における主人公と他者の執心による消耗は対称関係にあった。さらに、巻上が男性不足を理由に女性が執心を抱く世界（主人公優勢・女性劣勢）、巻中が主人公と女性の執心が衝突する世界（男女の性力の均衡）、巻下が女性不足を理由に男性が執心を抱く世界（主人公劣勢・女性優勢）であったように、物語が後半になるにつれて執心の発生源と消耗が他者から主人公へと変化していき、主人公の他者に対する立場は、優勢から劣勢へと変化していくのであった。

加えて、男女の執心が衝突する巻中を境に、巻上と巻下の同数の章では、主人公と他者における執心の発生と消耗が対称関係にあった。冒頭と末尾からの二章においても主人公と他者の執心の発生と消耗が対称関係にあった。こうした他者から主人公への執心の発生源



と消耗の変化（主人公の他者に対する優勢から劣勢への変化）や、主人公と他者の執心の発生と消耗関係の対称関係は、主人公がもてあそんだ女性の執心によって命を落とすように、因果応報の道理と、執心が主人公に纏わりつくさまを表現したものであった。やはり、主人公と女性たち（他者）の絡み合う執心という負の感情こそが、本書の主題なのである。

本書は数ある西鶴作品の中でも、「低調」、「猥雑」と評価される作品である。たしかに、そうした印象を受けるところがあることを筆者は否定しない。けれども、西鶴は本書において「執心」という負の感情に着目し、これを映し出している。しかも、「執心」という負の感情を軸に、各巻各章の話が複雑に絡み合う構造を構築し、主人公に対する他者の執心の深さを表現している。ここに彼の心理描写と、創作技術の高さの一端がうかがい知れよう。

付録

巻中・巻下内部(第一章と第五章、第二章と第三章)における主人公と他者の執心と消耗の相関関係を次に取り上げる。

○巻中内部

(巻中の一と巻中の五)

・ 幫間が一ヶ月間の色狂いの成果を語り、その褒美として「紫の下帯」を主人公に所望する。主人公は、その成果がたいしたものではないと否定し、自身が「むらさきのふたへ

まはり」を締めているのは、「千日千夜も是(女色)にあかず」であるからだと言語。(巻中の一)

・主人公は「女郎と名の付たるをひとりも残さず、毎日一人づつ揚て、首尾せぬといふ事」なく過ごす。その後、「色里一人もなく勤て、それより地女にかかり」きりになり、「三年」の月日が経つ。主人公はこの期間、相手にした女性の姿が大体変わらないことから、「千体仏」に逢っているかのような思いであったと回想する。その後、「すこしづつ見覚」するも、なにかと思いのままにつくす。(巻中の五)

※巻中の一での主人公は、女性に「千日千夜」飽きることがないと語るが、一方、巻中の五での主人公は、大坂の女性を相手に情事を繰り返すも、三年(およそ千日)で興が覚めたと言語されている。当該二章では主人公の発言と言動が相反している。

(巻中の二と巻中の四)

a 小宿の主人が、「後家」がどこの国でも「いつはりの談義参り」をし、彼女たちの「前中着の芥子銀は、男の餌」に用意したものであると語る。すると主人公は、その話しに心を浮き立たせ、「名の高き(後家)をまねき」よせる。(巻中の二)

a 主人公が道行く「女中」を見つけ、供をする男に「あの女中は何国への御参詣とたづね」る。すると男は気の進まない様子で、彼女たちは「信心のともがらにはあらず」と否定し、「諸国男執行」にまわるところであると答える。さらに男は彼女たちが、「さもしくかづけ物にはあらず、金銀づくは思ひがけもなし」と言う。男の言葉に主人公は横手を打って喜び、「この女中を幕の内へ引込」む。(巻中の四)

b 主人公と幫間たちは「命を鼻紙より軽く」、後家を相手に性力を発散する。「随分はがねをならす後家達」であるが、主人公たちには一度会っただけで懲りて、二度と会うものはいなかった。彼女たちの帰る際の姿を見ると、「腰元がかたにすぎり、又駕籠にかきのせられ、あるひは氣を取うしなひ、正氣にて帰るはひとりもなし」という状態だった。(巻中の二)

b 主人公と幫間たちは、「諸国男執行」に回る女性たちを相手にするも「夜露に男はしほれて」しまい、「もはやならぬならぬ、ゆるし給へ」と詫びる。しかし女性たちは平気な顔で、「我々一生の思ひ出に、最前の御自慢程に、あく程あかせて見給へ」と言う。すると主人公たちは、血をはき、目を回し、「いかないかな命つづかず。かかる女中に

出合し事、色道天命のつきなり」と言い、「取乱しうちふ」す。(巻中の四)

※二章の a として取り上げた場面では、主人公が興味を持つ女性が「いつはりの談義参り」(巻中の二)、「信心のともがらにはあらず」(巻中の四)と語られているように、信仰心ではなく色欲によって行動する人物と紹介されていることが共通している。さらに、前者の女性が、財力によって男を釣ると語られているのに対して、後者が、財力で思い通りになるような女性ではないと語られているように、財力という観点から女性の性質が語られていることが共通している。

b として取り上げた巻中の二での主人公は、自身の「命(性力)を鼻紙より軽く」消費し、相手の「後家」を圧倒し、彼女たちは気を失う。一方、同じく b として取り上げた巻中の四の場面での主人公は、「諸国男執行」に回る女性を相手にするが、彼女たちの

性力に圧倒され「命つづかず」と弱音を言い、気を失う。当該二章では主人公と女性の性の優位と劣位が対蹠をなしている。

○巻下内部

(巻下の一と巻下の五)

・「菱川が筆にて、浮よ絵の草紙を見るに、ししおきゆたかに腰つきにまるみありて、大かたは横目づかひ、男めづらしそうなる貞の色、さながら屋敷めきて、江戸女このもしく、見ると聞と寝と、恋ほど各別にかはれるものはなし。いざ遊興のもとでのあるうちに、一たびくだりて、たとへ腎虚して死すとも、むさしのの土とならいでは。」(巻下

の一)

・「物にはかぎりあり、人ほどかはるはなし。さかんの時は外右衛門、一生色道の達者、われにまされる人、世にはらじ。いまだ若おとこのおのれが、妻ひとりさへもてあまし、夏さへあしひゆるとて、綿入のたびをはき、霜さきのくすり喰、おかしかりしに、我もまた闇がりをこのみ、あしもとさだめかね、野も山もみな女の良に見えて、今のうたてさ、髪のおぶらのかほり胸につかへ、ふともものしろきが目にかかると上気して、さりとはさりとは是ほどまできらひにもなる物かな。」(巻下の五)

※巻下の一での主人公は「恋ほど各別にかはれるものはなし」と断言するが、一方、巻下の五での性力が枯渴した主人公は、「人ほどかはるはなし」と語るように、変わりやすきものの対象が変化している。さらに巻下の一では、「たとへ腎虚して死すとも、むさしの土とならひでは」と覚悟を決めるが、一方、巻下の四では女性を「さりとは是ほ



どまできらひにもなる物かな」と発言するように、当該二章では主人公の覚悟と実体が相反している。

(巻下の二と巻下の四)

・主人公と幫間たちは、江戸の女性を相手に情事を繰り返す。すると男たちはみな、「女のかたから金子その外、かたみもらはざるはひとりもなし」であった。主人公は京・大坂の女性たちが金を使ってもさらに欲しがるのに、「こんな目出たい事のありとは、所の人はしらずや」と思い、性力の強い若者を百人ほど「岡付にいで」江戸に送れば、どんな商売よりもましだろうと考える。しかし、「算用して見る程、是も命のちぢまる談合」ということになり、「ばらりと座敷を立」つ。(巻下の二)

・主人公は「物ずき」にも、「手づから水をくめば、太夫は葉胡蘿などそろへてしたし物になして」といったように、請け出した太夫とともに揚屋で生活する。幫間たちは毎日客になって、遊女を揚屋に呼び、その費用はすべて主人公が払う。しかし、この生活も経費がかさみ、「京より岡付の金子も、今はのこりすくなく」なり、蓄えが残り一年分となったところで、主人公は「女郎と打死」と覚悟を決め、「腎水有ほど」消費する。

(巻下の四)

※巻下の二での主人公は、女性と枕を交わすと、奇妙なことに女性から礼金を貰う。一方、巻下の四での主人公は、「物ずき」にも請け出した太夫と揚屋で生活をともにし、財を消費する。当該二章では、主人公の奇妙な体験による蓄財・散財が対蹠をなしている。

\*1 本文の引用は、富士昭雄訳注『決定版対訳西鶴全集 一七』（二〇〇七年 明治書院）に

拠った。旧字体は適宜、現行の通行字体に改めた。

\*2 岸得蔵『色里三所世帯』（『仮名草子と西鶴』所収 一九七四年 成文堂）

\*3 近年では、上阪彩香氏が西鶴作者説を肯定している。（「西鶴遺稿集の著者の検討―北

条団水の浮世草子とその比較分析」（『計量文献学の射程』所収 二〇一六年 勉誠出版）

\*4 暉峻康隆「好色盛衰記」と「色里三所世帯」（『西鶴評論と研究下』所収（一九五〇年

中央公論社）

\*5 西鶴作品と能・浄瑠璃の関係については、山口剛氏が『好色五人女』を構成する五巻と、

その各巻を構成する五章が、いずれも能の五段構成をうつしたものであることを指摘している（「西鶴について」（『山口剛著作集第一巻』所収 一九七二年 中央公論社）。

\*6 本文の引用は、霞亭文庫所蔵本に拠った。

\*7 本文の引用は『俳諧類船集索引付合語篇』（一九七三年 般庵野間光辰先生華甲記念会）に拠った。

\*8 注1同書

\*9 本文の引用は、富士昭雄訳注『決定版対訳西鶴全集 三』（一九九二年 明治書院）に拠った。旧字体は適宜、現行の通行字体に改めた。

\*10 『三所世帯』を含め、西鶴の好色物に分類される浮世草子作品の多くは、京を物語の出発点としている（『好色一代男』、『諸艶大鑑』、『好色一代女』など）。物語が京から始

まるのは通例と言ってよいかもしれない。

\*11 浜田泰彦 『色里三所世帯』の再検討―「天子」を真似る外右衛門―（『鯉城往来』 1

9 二〇一六年一月）

\*12 森田雅也 『色里三所世帯』と京都・大坂・江戸―西鶴と貞享期の読者の三都意識をめ

ぐって―」（『日本文藝研究』五五卷（四）二〇〇四年三月）

\*13 ダニエル・ストリューヴ 「西鶴晩年の好色物における「男」の姿と語りにおける機能」

（『アジア遊学』 195 二〇一六年三月）

## おわりに

本論文では、井原西鶴の好色物に数えられる『椀久一世の物語』『好色一代女』『色里三所世帯』の浮世草子三作品を取り上げ、各作品の主題と、その表現方法を検討してきた。

第一章では『椀久一世の物語』の主人公が、物語後半から結末にかけて「狂人」と化し、自己の異常行動によって命を落とすことに注目し、主人公の精神異常の悪化を描いた物語であると想定して、それが如何なる方法によって映し出されているのかを検討してきた。

「むしやうといふ男」や「狂人」と評される主人公であるが、その異常性の真相は、認識と行動の不一致であった。そうした主人公の混乱した行為は、一章（一話）だけでなく、

始章から終章に至る隣接する章にも、章をまたぐ形で出現していた。すなわち、主人公が弁才天より授かった財力を自己の混乱した判断により浪費を開始する始章から、「しやつら二つに、刀握れば覚えありと、竹杖をするりと抜けば」という倒錯した言動がもとで命を落とす終章まで、各章は主人公の混乱した行為によつて鎖のように連接されていたのである。

そして、上巻の四、上巻の七、下巻の三を境とした前後の章における主人公の混乱した行為には、相関関係が存在していた。この三章を境とした前後の章における主人公の混乱した行為に、相関関係が存在するということは、物語が進むにつれて、既視感のある混乱した行為の出現頻度が高まることを意味する。つまり、当該三章を境とした主人公の混乱した行為の相関関係とは、過去と現在の境遇を対比するものであり、かつ、物語が進むに

つれて過去と現在の重なりが増すことによって、認識と行動の不一致という異常な実体を浮かび上がらせる構造なのであり、主人公の異常性の段階的悪化を映し出しているのである。

結末で命を落とす主人公の人生は、財力の獲得、散財、破産、松山との離別、狂人化という具合に、転落の一途を辿る。この人生の転落は、自己の認識と行動の不一致という混乱が原因であったように、各章における主人公が経験する出来事は、混乱によって連接されている。さらに、その混乱する姿を物語の進行とともに、既視感という形で重ねていくことによって、死の原因となる混乱の悪化が映し出されていたのである。

第二章では『好色一代女』を取り上げ、従来から指摘される性の過剰と性の欠如の二項対立の構造に注目し、この観点から主人公の回想が映し出すものを検討した。



始章には相反する性に関する願望を語る二人の若者と、彼らが抱く願望の実現を不可能であると否定する観察者が登場する。従来、二人の若者については、「性の過剰」と「性の欠如」のモチーフを提出する存在であると指摘されている。筆者はこの指摘に加え、二人の若者と観察者が、過剰な性の欲求と、それを否定する性の破綻の不可避というモチーフを提示する存在でもあると想定して、主人公の回想の分析を進めた。

主人公は二人の若者に乞われ過去を語るが、この過去というのが、まさに過剰なまでに性を求めた歴史であった。回想に登場する主人公は、終末において、自己の性が限界に達すると大雲寺に参詣し、安置されていた五百羅漢像にかつて関係を持った弱蔵や強蔵といった男たちの面影を見出す。主人公は彼らの死（性の破綻）という現実を通して、ときに強蔵（性の過剰）や弱蔵（性の欠如）を相手に、性を過剰なまでに追い求めてきた自身に

は、自己の命以外何も残されていないという虚しい事実を認識する。始章では過剰な性の欲求と、それを否定する性の破綻の不可避のモチーフが提示されていたように、有限である性を追い求めることの虚しさが作品の主題なのである。

そして、「性の過剰」と「性の欠如」が一方のみで成立しない相対的なモチーフであるように、作品を構成する各章には、これを表示する二人（若老、粹無粹、美醜、など）が登場し、彼らの破綻の様子が映し出されていた。さらに、この相対的なモチーフとそれを表示する二人は、各章の内部だけでなく、隣接する二章や、隣接する巻の同数の二章、さらには主人公の職種（遊女期・非遊女期）に基づいた二章といった様々な位置に配置されていた。各章は独立した話によって構成されるが、その各章は「性の過剰」と「性の欠如」のモチーフによって相互に接続され、作品全体で性の破綻の不可避という主題に通じるモ

チーフを表示していたのである。

第三章では、『色里三所世帯』における対立する主人公と女性たちの執心を主題と想定して、その感情がいかなる方法によって作品世界に映し出されているのかを検討した。

作品を構成する各章には、要望と対応という話の枠組みが存在し、当該場面に登場するいずれかの人物に欲求不満という形で執心が現れていた。こうした登場人物の執心を映し出した五章によって構成される各巻（三巻）は、能や浄瑠璃に類似した五段構成であり、展開にも共通性があった。その展開は、中央の第三章を境として、おおよそその前半では他者が執心によって消耗し（主人公優位、他者劣位）、後半では主人公が執心によって消耗するというものであった（主人公劣位、他者優位）。しかも、前半と後半における主人公と他者の執心による消耗は対称関係にあった。さらに、巻上が男性不足を理由に女性が

執心を抱く世界（主人公優勢・女性劣勢）、巻中が主人公と女性の執心が衝突する世界（男女の性力の均衡）、巻下が女性不足を理由に男性が執心を抱く世界（主人公劣勢・女性優勢）であったように、物語が後半になるにつれて執心の発生源と消耗が他者から主人公へと変化していくように、主人公の他者に対する立場は、優勢から劣勢へと変化していくのであった。加えて、男女の執心が衝突する巻中を境に、巻上と巻下の同数の章では、主人公と他者における執心の発生と消耗が対称関係にあった。冒頭と末尾からの二章においても主人公と他者の執心の発生と消耗が対称関係にあった。こうした他者から主人公への執心の発生源と消耗の変化（主人公の他者に対する優勢から劣勢への変化）や、主人公と他者の執心の発生と消耗関係の対称関係は、主人公がもてあそんだ女性の執心によって命を落とすように、因果応報の道理と、執心が主人公に纏わりつくさまを表現したものであった。

やはり、主人公と女性たち（他者）の絡み合う執心という負の感情こそが、本書の主題なのである。

以上が、本論文で取り上げた三作における主題と、その表現方法である。

三作を比較すると表現方法における共通点が見えてくる。それは、独立した内容によって構成された各章が、主人公という存在に加え、もう一つの要素で有機的に関連づけられていたという点である。『椀久一世の物語』では、主人公の認識と行動の不一致によって各章が関連づけられていた。『好色一代女』では、「性の過剰」と「性の欠如」（性の破綻の平等）という要素によって各章が関連づけられていた。『色里三所世帯』では主人公と他者の執心と消耗（因果応報の道理）という要素によって各章が関連づけられていた。つまり、三作はいずれも、作品の主題とするところによって、独立した内容を持つ各章が、

作品世界を網羅するように関連づけられていたのである。こうした構造は、過去との対比により、作品の主題とするところを映し出す仕掛けであるのだろう。読者は、作品を読み進めていくと、過去に目撃した場面と類似・共通した場面に次々と遭遇し、その類似・共通点を思いかべると、作品の主題とするところが見えてくる。換言すれば、読み進めていくと既視感の高まりによって、主題とするところが徐々に映し出されてくるのである。

すなわち、浮橋康彦氏が『好色一代女』における隣接する章の話題の関連について、「俳諧的連想」（本論文第三章、注9参照）と指摘するように、三作では俳諧的な連想と接続によって作品世界が構築され、その主題とするところが映し出されていたのである。この表現方法・作品構造は、三作で用いられているように、西鶴の主題を映し出す一つの方法と

言ってよいだろう。

本論文では、多種多様な西鶴作品のうち、僅か三作品を取り上げ、主題とするところの表現方法の特徴を分析したのみである。他の西鶴作品における表現方法の特徴の分析については、筆者の今後の課題としたい。